
聖剣の姫君 第二部 黄昏の行方

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖剣の姫君 第二部 黄昏の行方

【Nコード】

N0074F

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

グラジオン王国第一王女であるレミュートはグラジオン王国を出国後、心強い仲間と共に幾つかの旅を重ねる。そして、一年と半年。彼女は未熟ながらも様々な経験を積むことでようやく日々に希望を持てるようになった。そんな彼らも一つの大きな冒険を終え、久しぶりに聖王都スリンピアに立ち寄ることとなった。一見すれば平和な日々であったが、彼らは違和感を感じるようになる。世界は僅かに変化していく、それらは所詮全ての始まりに過ぎず、そこから引き起こされる悲劇の発端に過ぎなかった。世界を巡るレミュート達、

その先にあるものはたして・・・。異世界冒険活劇の第二章、開
幕。

第一話 神聖スリンピア王国 (プロローグ) (前書き)

ようやくメインシナリオに突入と相成ります。前回のものより1年半後、レミュートも少しばかり成長し冒険者としてようやくというところですよ。

第一部はこちら (<http://ncode.syosetu.com/n9464e/>)

第一話 神聖スリンピア王国 (プロローグ)

目を閉じれば闇。

それ以外には何も無い。一欠片の光の明滅も存在しない、一切が沈む夕日の向こう側へと追いやられ、それ以外には何者も存在を許されない閉じた世界。

やがて現実を浸食する運命にある世界。

そして、なぜか心地の良い揺りかごのように感じられる世界。

目を閉じれば闇。そうして世界は終わってゆく、そしてやがては目を閉じずして訪れる世界。

すべてがこうなってしまうえばなんと心地の良い事だろうか、私は考えるようになった。

そして、私にはその機会が与えられた、故に私はここにいる。故に私はそうあり続ける。私の望みが叶えられるその日まで。

少女は物思いから意識を戻す。少しばかり眠っていたのかも知れない。虚ろな意識の中、肌に感じる現実の感触は酷くぼんやりとしているように感じられた。

村を見下ろせる高台に一陣の風が通り抜けてる。空は赤く、大地は闇へと埋没していく。それは一時の眠りなのか、永久への旅立ちなのか。

それを推し量る術はないが、私にとってそれは最も心がざわめく時だった。

今宵は月のない空が広がるだろう。

大地の一切を暗かりが支配し、草木も人間もその静かな眠りを障げられることはない。

少女は外套を引き寄せ、一瞬襲いかかる悪寒に耐えた。

大丈夫、その苦しみは一瞬だけだ。

「せめて穏やかな闇に抱かれんことを……。」

漆黒に身を包む少女はまるでその罪の許しを請うように堅く目を閉じ、きつく手のひらを握りしめた。

その夜、また一つの村がこの世から姿を消した……。

(1) 眠り(前書き)

現在：修正第3稿目(20080920)

(1) 眠り

馬車がようやくまともな街道に出た頃には、既に夜の帳とほじが下り始
めていた。

「こりゃあ、到着は夜だな。」

狭い馬車の中、先ほどまで煙草タバコを吹かしながら本を読んでいた魔
術師風の男が幌をまくって外を見ていた。

小柄ながらその碧眼は見た目の若さと釣り合わないほどに鋭い。
藍色に輝く髪は短くまとめられ、その鋭利にとがった耳を惜しみな
くさらす。その容貌は彼がエルフ族であることを示す。

「随分時間がかかったな。」

それに答えたのは、剣士風の大柄な男だった。仲間の武器の手入
れを任されているのか、先ほどから馬車の半分を占拠して剣やナイ
フなどといったものを並べてヤスリを掛けている。

「今夜は、野宿になるのかな？」

荷物を眺めながら羊皮紙にメモをとっている女性、ユア・タリス・
キルリアルが口を開く。荷物の管理を任されている彼女はおそらく、
行き先の街で補給する道具の目録をとっているのだろう。さっきか
らその目録と今ある資金を見比べて眉をひそめている辺り、収支が
合わないのかどうしても補給できないものがあるのか、時折「どう
しようかな？」という言葉が出るあたり、僅かな深刻さが伺える。

「まあ、その心配はねえだろう。宿は空いてるだろうし、食事も携

帯食が残ってる。ところで、何さつきからうなってんだ？」

そんな彼女を見かねて、魔術師風の男、ベルディナ・アーク・ブルーネスが羊皮紙をのぞき込んだ。

「うん、それがね。手持ちのお金だと少し足りないの。」

彼女、ユア・タリス・キルリアルは羊皮紙をベルディナに手渡し、その内の幾つかの品目を指さした。

「何々……。冬咲き桜の根子、火喰い鳥の血に紫蛙の干物が。確かに、最近値上がりしてんなあ。・・・手持ちはいくらだ？」

「えーっと……。滞在費と諸経費を分けると、50ソートが限界かな……。」

「50か、微妙だな。」

彼らが頭を抱えているのは、最近になって物価の高騰だけが原因というわけではない。

彼らのような現代の旅人の多くは、古代遺跡の調査や未踏の土地を開拓するような仕事は殆ど行っていない。

確かに、極希ではあるが所謂冒険者らしい仕事を手がける機会も巡って来ることもあるが、そういった仕事も所詮は国が編成する調査団の道案内であったり、雑用程度にとどまることが殆どである。未開の遺跡は国家の財産であり、それを勝手に調査することや、価値の有る無しにかかわらずその遺産を勝手に売買することは重大な犯罪行為である

結局、まともな冒険者は荷馬車の護衛や地方に発生した魔物を退治する仕事を請け負うことで食いつないでいくしか他がない。

戦時中であればどこかの国の軍隊に志願し、傭兵として戦場を巡る者も多くなるが、現在の世界情勢は比較的平穏を保っている。

そのため旅人が糧を得るにはやはり護衛や魔物退治といった仕事を
するしかないのだ。

その荷馬車の護衛や魔物退治などで得られる報酬は、まあ二束三文
と言っても言葉が過ぎることはないだろう。更に、その報酬には
経費が含まれておらず、その仕事をやり遂げるために多くの経費を
投じても支払われる報酬が変わることはない。

いかに経費を抑えて仕事を完遂するか、それはやはり護衛中に敵
となるべく交戦しないようにすることが一番ではあるが、そればか
りは旅人にとってはどうにもならないこともある。

「目録にミスリルの剣を追加しておいてくれるとありがたい。」

苦い顔を浮かべながら剣の手入れをしていた男、ミリオン・ラス
ラ・プロミネンスがその表情に違わない口調でそう告げた。

「なんだ？ダメになったのか？」

ベルディナが彼の方を向く。ミリオンが手に取っていたのは、彼
の体格には合わない短めの剣だった。

「レミーのものだ。ここまで騙し騙しやっていたが・・・これ以上
研げば刀身が細くなりすぎる。もう限界だろう。」

「確かに・・・買い直すなら今のうちか。もっと丁寧に使いやが
れってんだ。で、その本人はどうした。さっきから声をきかねえが。」

ベルディナはいらだちを隠さず頭をかきむしった。

確かに剣は消耗品であり、むしろこの一年半の間交換する必要が
なかったのは幸運と言っていいだろう。

それについてはベルディナも重々承知していることだが、金のな

い今になって交換しなければならぬとあつてはさすがの彼も憤るより他がない。

「さつきから隅でお休みだ。あまり大声を出すな。」

ミリオンが目線で指した方には、馬車の縁に背中を預けて眠りこける少女がいた。毛布が簡単に掛けられているのは、おそらくユアが気をきかせたのだろう。

燃えるような長く長い髪が幌の隙間から吹き込む風に揺られる。

「紅い髪は死を、青い瞳は不幸をもたらす。」その忌み嫌われた二つを持つ彼女は、そういった意味で多くの人に強烈な印象を与える。しかし、三人はその髪が好きだった。

「まったく、こいつは気楽なもんだ。」

ベルディナはそういうと肩を落とした。

「大物なのだろう。さすがは一国の王女と言ったところか。」

ミリオンは手入れの終わった武器を鞘ほちにしまい、ユアから受け取った目録にざっと目を通すと、やはり苦い表情を浮かべた。

「街に着くまで寝させてあげようよ。今回は、さすがに辛かったもの。」

「ああ、そうだな。」

ベルディナは眠る少女、レミュート・アンファイン・グラジオンを見ながら今回のことを思い返した。

今回の仕事は羽振りのいい仕事だったはずだ。少なくとも依頼を受けて出発するまでは疑いようの無いことだった。その考えが反転

したのはどの時点だったか。

普通に考えて、この仕事はただの荷馬車の護衛であったにもかかわらず、その報酬は一般的な額を大きく上回っていた。ならば、何故彼らがこれ程までに割の合わない状況に陥ってしまったのか。

敵が多すぎた、そして苦戦を強いられすぎた。

この手の護衛における敵とは、荷物を狙う盗賊と昔から相場は決まっているはずだった。

事実、半年前迄なら彼らの敵とは多くはそういった手合いだけだった。

しかし、今回に限って・・・いや、ここ最近になってといった方がいいのかもしれない・・・彼らの敵の多くは盗賊では無くなっていた。それは、まっとうな命を与えられず、まともな意識すら持たない魔物であった。

敵が盗賊であればまだその対処は容易だとベルディナは考える。なぜなら、例え無法者であっても少なくとも人間である故にこちらが圧倒的な戦力を持っていると悟らせればたいていの場合には戦闘にはならない。

時折、彼我の戦力差を見誤ったごろつきが襲いかかってくることはあるが、手合いの力量を読めない者にまともな戦術などありはしない。

しかし、魔物は違う。まともな意識すら持ち合わさないがために自ら滅びることを恐れない。それは、敵として立ちはだかれた以上、何をもつても撤退させることは出来ないため、それを完全に討ち滅ぼさない限り戦闘は終わらないことを意味する。

更にやっかいなことに、魔物というのは魔術以外の攻撃が効きにくいのだ。

ミリオンのような豪腕の剣士であれば、それなりに有効なダメージを与えることが出来た。しかし、レミュートのような軽装の剣士では、魔術を併用しない限りまともな傷を与えることはできなかった。

それが少数であればまだ対処のしようがあるが、もし、それらが徒党を組んで襲いかかってきたとすれば・・・例え熟練の旅人であっても命の覚悟を求められるだろう。

レミユートが魔術を使えて助かった。と、ベルディナは心底思った。そのせいで、レミユートには随分と無理をさせてしまったが・・・。

「魔物が多すぎる。なぜ、今になってこれ程に増えた。ベル、何か心当たりはあるか。」

ミリオンは、ユアにお茶を入れるように頼み、広げていた荷物をまとめた。

「長期的に見てこういうことは別に珍しいもんじゃねえ。」

「つまり、魔物の発生量には周期があるということか？」

「それほど厳密な周期ってわけじゃねえけどな。俺の見立てだと・・・そうだな、だいたい20年ごとか・・・。」

「20年前だと・・・私がベルに拾われた頃になるのかな？」

ユアは小首をかしげた。

「ああ、そうだな。俺がお前をグラジオン王国に連れてきた頃だ。」

ベルディナの脳裏に雨に濡れる細い路地裏の風景がよぎるが、彼はすぐにそれを打ち払った。

「やはり、その時にも今のような状況だったと？」

「そうだな・・・と、言いたいところだが・・・正直なところ今ほど酷くはなかった。この状況は過去100年間で最悪だろうよ。」

「100年、と聞くと遠大に思えるが・・・君にとってはおそらくそ

うでもないのだろうな。」

「まあな。俺が生きてきた時代だ。」

300を越える時を生き続けてきた彼にとって、この100年の時はいかほどのものだったのだろうか・・・。

ミリオンは、ユアが入れたお茶を口に含む。いくら彼女が点茶に長けているとはいえ、手持ちのものではそれほどの味を出すことは出来ない。

しかし、ミリオンはこの味が好きだった。少なくともベルディナが王国で入っていた物に比べると幾分かまともであると思える。最も、それを言えばベルディナが酷く機嫌を悪くするだろうから口にしたことはない。

「私も、少し眠くなってきたよ・・・。」

暖かいお茶を飲んで気分も落ち着いたので、ユアは目を擦りながら小さくあくびをついた。

「少し眠るといい。街に着いたら起こす。」

ミリオンは毛布を渡すと、ユアから荷物を受け取った。

ベルディナは、ランプの火を少し弱めるとミリオンを誘って彼女たちが眠る反対側に居場所を移した。幌の隙間から僅かに見える外の風景は、残り数刻ほどで目的の街への到着を告げていた。

(2) 聖王都スリンピアの朝(前書き)

現在：修正第3稿目(2008 09 20)

(2) 聖王都スリンピアの朝

聖王都スリンピア。そこを拠点とする旅人、冒険者は多い。その一番の理由として、そこは世界の中心として様々な物や情報が集まる場所であることがあげられる。

だが、人の往来が激しいが故に街の治安はどうしても悪くなってしまいがちである。酒場での酔っぱらい同士の喧嘩など日常茶飯事であるし、商売においてのトラブルや詐欺、窃盗なども珍しいことではない。

故に、この王国は王宮に勤める騎士団とは別に、城下を警護する警備兵团を持つ珍しい国でもある。

現在、城下の平穏が保たれていることは彼ら警備兵团の功績であり、これは王国が世界に誇ることでとされている。

夜も明けきらない刻から街は人の行き来が活発となる。街角では既に新聞屋が行き交う人々に新聞を売り渡している風景が見て取れ、その店の売り子が契約した商店や宿屋にそれを配達する姿もある。

朝食用のパンを作るベーカリーは今が最も忙しい時間帯であろう。街行く人々も、焼きたてのパンの匂いに引かれて足を止め、店内を眺めては店が開くのを楽しみにしている様子がかがえる。

朝の早い老人達は散歩をしつつ顔見知りと挨拶を交わし、朝市を目当てに街を行く主婦や料理店の女将が街角で雑談を交わす姿も朝の風景にとけ込んでしまっている。

「1000年経っても変わりやしねえな。」

比較的朝の早いベルディナは、朝のひんやりと澄んだ空気に少々身をすくめながら道を歩く。

この大きな街でも見知った顔はいる。彼の容貌は特徴的であるし、

この一年半で知り合った同業者や商売人も多い。その中で自分が何者であるかを知る者は、おそらくいないだろうとベルディナは予測している。そうでもないがこの生活をする意味がない。彼はそう考えていた。

「旦那！一部いかがですか？」

そんな威勢のいい声に振り向くと、彼に声を掛けたのはなじみの新聞屋の店主だった。

「よう、久しぶりだなオツサン。まだ潰れてなかったとは、意外だ。」
「馬鹿野郎！演技でもねえこと言いな！」

ベルディナにとっては軽いジョークのつもりだったが、店主の反応はあまりにも激しいものだったためベルディナは言って後悔した。

「悪い悪い、あまりにも久しぶりだったんでつい口がすべっちゃまった。」
「そう思うなら一部買ってってくださいや。うちが潰れねえためにも協力をお願いしやすぜ。」

しかし、そこはさすがは商売人。それすらも売り上げにしている店主のたくましさには頭が下がる思いだった。

「そうだな、いくらだ？」
「へい、300ソイトでせ。」

【1ソイトは1000分の1ソート】

「少し値上がりしたか？」

ベルディナは、懐から300ソイト分の硬貨を出しながら、一週間前の値段を思い出していた。彼の記憶に間違いがなければ確か200ソイトだったはず。一週間で100ソイトの値上がりであれば、気にならないわけにはいかなかった。

「紙代と情報料が上がりましてね。」

ここにも影響が出ているのか・・・とベルディナは痛感した。

新聞屋にかかわらず、書物を扱う商社であればもつとも切実になるのは紙代と印刷料に尽きる。これだけ魔物が活発になれば紙の原料の木をとるために森にはいるのも危険になる。おそらくそれが理由で紙の原価が高騰しているのだろうとベルディナは予想した。

情報料の値上がりは無視できないことだった。おそらく、道中の危険が増したことから行き交う人も少なくなってしまったために、入る情報量が少なくなったことが原因だろうか。

この分だと建築関係や造船関係にも影響が出ているかもしれない。と思いつつ、新聞の経済欄に目を通すとやはり彼の予想通りとなっていた。製鉄関係も軒並み頻拍している状況が見て取れる。

ミスリル製品が比較的安定しているのは、原産国のグラジオン王国の情勢がまだ安定しているからだろうと予想がつきそうだ。

いや、むしろこういう情勢だからこそ武器となるミスリルの輸出が増大し、国が安定しているという逆の状況が起こっているのかも知れない。グラジオン王国の経済状況も調べる必要があるなとベルディナは思い立った。

「まさかここまで影響が出ているとはな。」

予想以上だったとつばやき、ベルディナは新聞を折りたたみ小脇

に抱えた。

「まったくです。うちはまだ顧客が安定してますからましなんですがね。知り合いの幾つかは店をたたんじまって、この分だとうちも近いうちにそうなるかもしれないですね。」

「所詮人間なんてものは自然界の気まぐれに翻弄ほんろうされるより他がねえのかもな。」

「『魔獣が鳴けば屋根が飛ぶ』って奴ですね。」

「嫌な諺だぜ。・・・じゃあな、俺が言えたことじゃねえが、倒れねえていどにがんばってくれ。」

「へい、ご鼻屑にお願いしやせず、旦那。」

二人はカウンター越しに挨拶を交わすとそれぞれの役目に戻った。聖王都の西にそびえる天嶮ポルドーミサからようやく姿を見せた太陽がまぶしく辺りを照らし始める。

ベルディナは足を止めてオレンジの光に染まっていく町並みをただじっと見上げた。

「・・・『それでも世界は変わらず朝を迎える、世はことも無し。ただ人のみが変わっていく』・・・か・・・。」

ベルディナは、先ほど店主が口にした諺の続きに隠された下りをつぶやいた。

（だが、世界そのものが変わってしまうようなことが起これば。俺は、その時どうしているのか・・・）

ベルディナは懐から煙草を取り出すと指先にもした火でそれを吹かし始めた。

「考えるだけ無駄か・・・。」

言葉と共に吐き出された白煙はゆっくりと空にとけ込んでいき儚く消えた。

(3) 王女の意味(前書き)

現在：修正第2稿目(20080912)

(3) 王女の意味

ベルディナが宿に戻る頃、レミュートとミリオンは既に起き出しており、談話室でコーヒーを飲んでいる所だった。

「お帰り、ベル。」

結局、昨日の夜は街に到着しても目を覚まさなかったレミュートは眠ったまま宿に運ばれることとなった。「やはりこの子は将来大物になるな。」と笑うミリオンに抱きかかえられたレミュートを見て、ユアが少し不満そうな、うらやましそうな顔をしていたことをレミュートもミリオンも知らない。

「おつ、今日は早いなレミー。雨でも降らせるつもりか？」

ベルはそう茶化すと、帰り際に読んできた新聞をミリオンに投げ渡した。視線をコーヒーにおきながらもそれを空中でキャッチしたミリオンは、ベルディナに礼を言いうとそれを机に広げた。

「私だっていつも寝坊する訳じゃないわ！」

昨日は夕食を取れなかった彼女はベルディナの帰りが待ちきれなかったらしく、既に朝食のパンに口をつけていた。

「あれだけぐっすりと寝ていたのだ。それで寝坊されても困る。」

ミリオンは、ベルディナから受け取った新聞を流し読みしながらコーヒーのお代わりを貰った。

「そついやあ、ユアの顔が見えねえな。まだ起きてきてねえのか。」
「ユアはお風呂に行ってるよ。』もうやだ、限界!』だって。」

普段から身だしなみに気を遣うユアのことだ、仕事で暫く風呂に入れなかったことをストレスに感じていたのだろう。レミュートはそれより空腹に耐えられなかったのか、その着衣は薄汚れたままだった。

（全く、これではどちらがお姫様か分かったもんじゃねえな。もつとも、旅人としてはレミーの方がよっぽどらしいっていえばらしいんだが・・・）

血は争えんな、とベルディナはつぶやくと近くを通りかかった給仕にモーニングコーヒーを注文した。

宿に備え付けの風呂から上がったユアを待ち、レミュート達は朝食をとることとなった。

スリンピア王国は海と山と森に面しているため、新鮮な食料が手に入りやすい。そのため内陸と比べ、その料理の味付けはかなり薄めだ。

特にレミュートにしてみれば、これだけ薄味の料理があること自体が驚きだったようで、グラジオン王国の濃い肉料理の味に慣れた彼女が、この国の繊細な味付けになれるには少しばかり時間がかかったらしい。

スリンピアの料理で特筆するべきは海産物のバリエーションの広さだろう。世界広しといえどもこの国ほど魚料理にこだわりを見せる国も珍しい。特に生魚の切り身に油を使わないソースをかけただけの料理は、初めてこの国に足を運ぶ旅人を驚愕させる。

しかし、多くの旅人は生魚がこれ程までに味わい深く風味豊かであることを知り、食文化の深みを味わうこととなる。特に今の季節

は、北の冷たい海で育った回遊魚がスリンピア近海を横切る季節であり、身の締まった魚料理を味わえる季節である。

ベルディナはこの時期を密かな楽しみとしていた。

久しぶりのまともな食事に舌鼓をうち、脇目もふらずあつという間に平らげた彼らは食休みのお茶を飲みながらつかの間の談笑を楽しんでいた。

「やっぱり、ここのご飯はおいしいね。」

「そうよね。最初はぎよつとしたけど、今はとっても幸せ。」

「うん、おいしいご飯は好き。」

「ふむ・・・食後の茶が何ともいえん。」

「ミリオン、そいつは随分と老人趣味じゃねえか。」

「他人の趣味にけちをつけるとは君らしくもないな。」

「それもそうか・・・悪い、聞かなかったことにしといてくれ。」

「そうしよう。」

談笑も終わり、レミュートはカップをソーサーにおくと三人の様子をうかがった。そろそろ今後の方針を決めるべきか、とみなの見解は一致しているように思える。

「じゃあ、今後の予定を決めましょう。ベル、何か気になることはある？」

こういったパーティーの方針を決める話し合いの発端はレミュートが担うと言うことは彼らの暗黙の了解となっていた。この旅の始まりはレミュートの出国に由来し、彼女は自らの意思によって彼らの動向を願った。故に、彼女はその始まりの時からこの旅において何らかの責任を果たさなければならぬと思っていたのだ。

そんな彼女が出来ることは少ない。旅の始まりより一年と半年が

過ぎた今でも仲間の助けがなければ、彼女は一日として生きながらえることは出来ないだろう。

だから、彼女がせめて出来ることを考えた結果がパーティーの方針に対する責任だった。

それは、ともすれば非常に重い責任を背負うことになるということも彼女は覚悟していた。

レミユートの言葉にうなずき、ベルディナは早朝の散歩で得られたうわさ話、そして新聞から得られた情報をかいつまんで述べることにした。

今まで感じていた危惧が、既に現実的な影響を与えていること。曰く、魔物の増大による陸路、海路の滞り。それによる物資の供給難。物価の高騰による経済の混乱。

その中でももっとも興味が引かれたのは、魔物の襲撃を受けて壊滅した村がここに来て急増しているとのことだった。そして、そういった村からの難民が王都に流入し、大きな社会問題になっているらしいと彼は告げた。

ベルディナの話が一段落した頃を見計らい、レミユートはユアに自分たちの現状を訪ねた。

ユアの話は、主にパーティーの金銭面に関する問題だった。今回の仕事を受ける前に話していたことは、今回の仕事は随分と羽振りがいいとのことだった。この分ならばらくは仕事をする必要はなくなるかもしれない、と旅立ち前のユアはそう話していた。しかし、現状はそれが反転してしまっていることをユアは伝えなければならなかった。

ユアは、夜の家にまとめ上げた収支計算書を机に広げた。ユアらしい細やかな仕事はその文面にもはっきりと表れている。

「この分だと、必要な物をそろえるだけで報酬の殆どを使い切ってしまういそうなの。だから、すぐに次の仕事を見つけないと苦しいと思う。」

ユアはそういって自分の目算の甘さを謝るが、ミリオンの「君の責任ではない。このような事態は予測不可能だった。」という言葉に少しは安心したようだった。

レミュートはミリオンに意見を求めた。

「魔物の増大は気になることだ。しかし、それが自然の気まぐれであるなら耐えるしかない。今は次の仕事をどうするかを早急に決めてしまうことが先決だと私は考える。」

そして、自分たちは今後どうするか。それを決めるのはレミュートの役割である。

レミュートはテーブルに視線を落とし、空になっていたカップにお茶を注ぐと、ゆっくりとそれを飲み込んだ。いれて少し時間が経ってしまったお茶は生ぬるく咽を通りすぎる。

「次の仕事を探しましょう。ベルとミリオンは何か新しい依頼がないかを確かめて、ユアは私と一緒にその準備を。これでどうかしら。」

「いや、待て。今回補給する物の中には君の剣も含まれている。それなら、君と行動するのは私の方がいい。」

買い出しの目録をまだ目にしていなかったレミュートは、自分の剣がもうダメになってしまっていることは知っていたが、それを今回買い直すことは知らなかった。ベルディナとユアに目を向けると二人はうなずき返し、レミュートは「分かったわ」と答えた。

「私はみんなの洗濯をしておきたいな。昨日は遅くて出来なかったから。」

そういえば、ずっと時間が無くて着替えの洗濯がまだだった。さすがにいつまでも汚れた服装を置いてはまずい。

「そうね。じゃあ、ベル、依頼の確認をお願いできるかしら？」

「ああ、任せな。なるべく実入りのいいやつを探してくる。」

「ミリオンは私と一緒に街に買い物。ユアは洗濯をお願いね。」

「うん。分かった。」

「了承した。」

全員の役割が決まり朝食も終わった。レミュートはパンツと手を叩くと勢いをつけて立ち上がった。

「じゃあ、行動開始。行きましょう、ミリオン。」

レミュートの小気味のいいかけ声に気をよくしてミリオンもそれに続いた。

「ああ。早めに終わらせるとしよう。」

ベルディナは相変わらず面倒くさそうに肩をすくめるが、それは単なるフリだと言うことはみな知っていた。

「俺は、昼までには戻りたいが、ひよっとすると遅くなるかもしれない。昼飯は先にとっておけ。」

ユアは、そんなベルディナを見て、ニコニコとしながらお茶の後

片付けを始めた。

「あ、レミー。薬の関係は後で私が行くからいいよ。そのほかの物をお願いね。」

薬などの医療関係はユアが管理することとなっている。

「分かったわ。あ、お財布と目録をお願い。」

「うん。私が使う分は別にとってあるから、入ってる分を上手く使
ってね。」

ミリオンは、ベルディナから剣を買うための金を受け取るとレミ
ユートをせかした。

レミユートは急いでユアから受け取った財布の中身と買い出しの
目録を確認すると、宿から出ようとする彼を追いかけた。

「まったく、騒がしいもんだぜ。」

ベルディナは、そんなレミユートを見て薄くほほえむ。

「かわいいよ、レミーは。」

「お前の子供の頃にそっくりだ。」

「わ、私は、あんなに明るくなかったよ・・・。」

「どうだかな。知らぬは本人ばかりということだ。」

「もう！お父さん、やめて。」

ベルディナは紅くなって取り乱すユアを尻目に、「じゃ、後でな」と言い残し宿を出た。

『魔獣が鳴けば屋根が飛ぶ。それでも世界は変わらず朝を迎える、世はことも無し。ただ人のみが変わっていく。』

（だが人の子はそれでも希望を持って歩んでいける。世界はこともなく、人の世もまたことも無し。）

夜明けから朝の空気に変わりつつある街を眺め、ベルディナはそんなフレーズを思いついていた。

(4) 準備 レジューター (前書き)

現在：修正第3稿目 (2008 09 20)

(4) 準備 レミュート

旅に必要な物は、それがよっぽどの未踏の地に行くので無ければ現地調達した方が良い。これはミリオンとベルディナの共通認識だった。

特に長期の旅になると身につける荷物は出来る限り最小限にするのは当然のことであり、予期せぬトラブルで荷物を失っても自前で調達出来るようにならなければ旅人としてはまだ半人前だ。と、言うより、旅慣れしている二人にとって旅先で手に入る物をわざわざ金を払ってまで買うことは無駄以外の何者でもないと考えていると言った方がいいか。

しかし、どうしても現地調達が出来ない物もやはり多く、その最たる物が消毒薬や清潔な包帯、魔術のための専門道具（専門的には魔装具と呼ばれている）となるだろう。

特に魔装具に関してはやっかいな物で、魔術を専門としない者にとってはたかが石ころや布きれに宿代の何日分もの値段がつけられていることに憤りを覚えるほどだ。

「正直、私は魔装具屋は好きになれんな。」

薄暗い店内に所狭しと並んだ用途の知れない道具を眺めながらミリオンはそうつぶやいた。

「そう？ベルの研究室なんてこれよりもっとすごいけど。」

中央に複雑な聖印が閉じこめられている、紅く透明な結晶を手に取りながらレミュートはミリオンの方に目を向けた。

「私のような平の騎士がそのようなところに入れると思うか？」

レミュートはそんなミリオンに「それもそうね。」と返すと、再び魔装具の物色に戻った。

魔術師が王宮で行う研究はどの国でも機密性が高いものだ。普段はがさつなベルディナでもそのことに関しては、非常にシビアに行っていた。それは王女であるレミュートをはじめ、多くの大臣さえも、その重要なセクションへの立ち入りは禁じられていたほどに徹底したものだ。

故にレミュートもベルディナが何の研究をしていたかを詳しくは知らないのだ。

しかし、旅に出た今でも、時折彼が伝書鳩を使い研究に関して何らかのやりとりを続けていることから、その研究の重要度は高いと想像できる。

街角の隅の一角に立てられた魔装具店『アイアン・グローブ』は小さい店舗ながらもなかなか良いものが置かれている。

少し前まで、魔装具の全てはベルディナがそろえていた。パーティーの中で唯一の専門魔術師である彼が魔装具をそろえることは当然といえるが、ベルディナは魔術を行使するさい、殆ど魔装具を使用しないのだ。

彼ほどのレベルの魔術師になると、わざわざ魔装具の助けを借りる必要もないというらしいが、ミリオンは今まで魔装具を一切使わない魔術士を見たことがない。

輝^{ガネット}紅石や火喰い鳥の羽は炎の魔力を高めるためによく使われ、澄^サ碧珠^{ファイア}や白鯨の髭は水の力を、透^{ルビ}炎石や地中鼠の革は大地の力を、聖^エ緑石^{メラルド}や大鷲の尾羽は風の力を高める。そして、金剛石^{ダイヤモンド}は属性によらずあらゆる魔術を増幅する万能石として有名だ。

町中を歩く魔術士をよく見ると、どの魔術士も上記のいずれかの

道具を身に付けていることが見て取れるだろう。故に、魔術士は装アツ身セサリー具リに気を遣う金持ちが多いと思われがちだが、それは誤解に違いない。

そのような、一見煌びやかに見える装飾品は、魔術士にとって（若干、語弊があるが）大切な商売道具なのだ。

閑話休題。

ともかく、ベルディナはそういった魔装具を殆ど身に付けていないと言っても過言ではない。

確かに、導師や大魔術師ほどのレベルにもなると、自らの力を高めるために宝石や道具を使用しなくなる携行も確かにある。しかし、そういった高位の魔術師であっても必ず持っているものがある。

ミリオンは、店の入り口から中央にかけて、最も多く棚を占拠しているものを手に取った。

それは、一本の棒の先に子供のこぶし大の宝石が取り付けられたものだった。

棒と言ったが、それは入念に磨き上げられ、柄の部分には文字のようにも見える刻印が規則正しく刻み込まれた、いわゆる魔術士メイジ・スタツの杖ツツだった。

その先に付けられた宝石は、風の力を増幅するものだろうか。聖エ緑石メラルトのように透明では無いにせよ、鮮やかな緑に染まった石は風をイメージできる。宝石に少し詳しいものなら、その石が浄緑石タイコイスであると分かるだろう。それは、ミリオンの予想通り、聖緑石エメラルド程ではないにせよ、風の魔力を増幅する力を持つ石だ。

魔術に関する知識に疎い彼にとって、この杖がどの程度の力を持つものなのかは分からなかったが、周りにある杖と比べて比較的手頃なこの杖は、その機能もおそらく手頃な部類なのだろうと予測した。その造形も、周りのものに比べると極めてシンプルであるから、

魔術の初心者のために作られたものなのかもしれない。

どのような魔術士も必ず持っているもの、それがこの杖だった。しかし、ベルディナはその杖すらも使っている様子がない。そういえば……。

「レミー、一つ良いか？」

ミリオンは、店の奥で二つの輝石を比べながら難しい顔をしているレミュートに声をかけた。

「ん？なに、ミリオン。」

レミュートは、輝石から目を離さずに答えた。

「ベルについてもだが、私は君が杖を使っている所を見たことがない。君たちには必要がないのか？」

レミュートはそれを聞いて、「ああ……。」と呟くと、輝石を棚に戻しミリオンの方に目を向けた。

「ベルのことは分からないけど、私はその代わりのものを使ってるわ。」

どうやら、レミュートもベルディナが杖を使っているのかそうではないのかわからないらしい。しかし、彼女の言う”代わりのもの”とは何なのだろうか。先を促すミリオンの視線に答え、レミュートは（別にかくしていたわけではないが、）白状することにした。

「剣を杖の代わりにしているって言ったらいいかしら。これは、

ベルのアイディアなんだけどね。」

それを聞いたミリオンは今まで奇妙に思っていて聞かなかった事を思い出した。

レミュートが今まで持っていた剣は、旅の始めにこの国で購入したものだ。彼女は王国にいた頃、個人的に鍛錬をしていたものの、剣術に関してはまだまだ初心者であるため、ミリオンはなるべく扱いやすいものを選んだ。

ミリオンの見立てでは、レミュートは剣の資質に恵まれているとは言いが難かった。

それに関してはベルディナが常々ぼやいているように、『あいつが、本気で魔術士を目指したなら将来は偉大になれるだろうが、剣術では凡人の域を出ることはないだろうよ。惜しいもんだぜ。』

ということではミリオンも感じていたことだった。かくして、レミュートの剣の選定にはミリオンとベルディナの二人がかりで行われることとなり、その結果選ばれたものはミスリル製の小振りで軽いロングソードだった。ミリオンの持つ大剣と比べ、その差は大人と子供ほどにも離れていたが、レミュートの体格からいけばちょうど良い塩梅だった。

話を元に戻そう。

その剣を彼女に渡した次の日、その剣の鍔ガードには見事な金の装飾と共に金剛石ダイヤモンドが設えられていた。

その時彼は、王族というものはそういった装飾を好むものかと思っていた。本来なら、旅をする以上そういった贅沢は諫めるべきだったが、その宝石はレミーが王国を出る際に持ち出したお気に入りのお宝だったし、ベルディナがそれに関して特に何も言わなかったのでミリオンも口出しはしなかった。

今考えると、その様式はさっきまでミリオンが持っていた魔法の杖のそれによく似ている。

「そうか、それで君の剣には宝石がついていたのだな。」

「ええ、加工はベルにしてもらったけど、今回は自分でやりたいと思うの。」

レミュートがいつもより入念に素材選びをしているのはその理由もあった。彼女は、ベルディナからいつも言われている、「本来、魔術士は自分の使う物は自前で用意するもんだ。」ということを含む回は実践したいと思っている。おそらく、それを聞いたベルディナは、お前はまだその段階ではないと言っただろうが、それでも自分で出来るヶ所は自分でやらせて貰うつもりをしている。

ミリオンは、再び素材選びに戻った彼女を見て、「これは随分と時間がかかりそうだ」と思い、

「私は、先に武器屋に行つて剣を選んでいますが、場所は分かるか？」と彼女に告げた。

「ええ、ここからすぐの、大通りの店でしょう？いつも行っている。」

「ああ、そうだ。では、ゆっくりと選ぶといい。終わったらその店に来てくれ。」

「分かったわ。」

レミュートは横目で、「それじゃ、また後で。」と言ってミリオンを送ると先ほどまでどちらにしようか悩んでいた輝石の片方を棚に戻した。

右手に残った輝石は、鮮やかな緑色をした石だった。一見すると、先ほどミリオンの手に持っていた杖に設えられた浄緑石ターコイズによく似ているが、実際は全く別物である。しかも、これは宝石でもない。これは、魔術的な性質のみを目的にして造られた人工輝石と呼ばれるものであり、宝石としての価値は皆無であるが魔装具としては十分な性能を持つものである。

最近になって実用化されたもので、その値段は天然の宝石と比べ非常にお手軽となっている。しかし、宝石としての価値以上に魔術特性もまだ天然の宝石には及ばないのだが、レミュートのような駆け出しの魔術士にとってはこの程度で十分であろう。

レミュートはようやく一つに決められた輝石の表面を丁寧になぞると満足げにうなずいた。

「随分悩んでいたね。それでいいの？」

突然彼女の背後から人の声がし、レミュートは大げさなほどに驚き、思わず輝石を取り落としそうになった。

「あ、危ない！気をつけてね、これはガラス玉の中心に聖印を施して、周りを色素でおおってあるだけのものだからとっても脆いよ。」

振り向くと、そこにはさっきまでカウンターで彼女を見守っていた女性店員だった。

「えっと、ごめんなさい。気がつかなくて。」

「いいえ、私もいきなり声をかけてしまっでごめんね。石が割れなくて良かったわ。」

そういつとその女性はレミュートから輝石を受け取り、それを少し眺めた。

「これを使う時は、周りを何かで補強した方が良いわ。さっき言ったようにとても壊れやすいから、金属か何か・ミスリルだと理想的だけど、そういうもので被った方が良いわ。一応、私の方で表面に強度を増すための印を施してあるけど、さっき聞いたような使い方だとそれでも心配ね。」

話を聞いていると、どうやらこの店の物の幾らかは彼女が手を加えた物らしかった。

レミュートは、彼女、セイラと名乗った店員の助言を借りながらその宝石の台座に使える物を選んだ。

セイラは若いながらも優秀な魔技士なんだと感じ、幾つか話をしている内に二人はすっかりとうち解けてしまった様子だった。

「確かに人工輝石は宝石と比べると質は落ちるわね。だけど、自分なりのアレンジが簡単にできるのと、何より安いから最近買っている人は多いわ。」

「うん、そうよね。さっきもこれにするか普通の宝石にするか悩んだけど、やっぱりその値段は魅力的だったわ。だって、宝石の5分の1なんだから。」

「今まで宝石を買ってくれていた魔術士の人たちはやっぱり宝石を買っし、今まで宝石が買えなかった人にも安い物を提供できる。とても助かっているわ。」

「お財布に優しいと私も嬉しいし。」

「それに、少しでも付加価値をつけるために予め細工をしたりしてのよ。」

「壊れにくくするとか？」

「ええ、そうね。後は、見栄えを良くするとか、今まで台座に刻んでいた刻印を予め輝石に刻んでしまっとかかしら。」

「ふーん。結構、いろいろ出来るのね。便利だわ。」

セイラの話はとても面白い。レミュートは普段、魔術のことはベルディナから学び取っている。しかし、ベルディナはやはりというべきか古い魔術師であるため最近のこういった技術に関しては懐疑的な側面を持つ。ひよっとしたら、今回レミュートの買ったこの輝石も、ベルディナが見れば眉をひそめかねないと危惧していた。しかし、セイラから教えて貰ったことを駆使すれば何とか納得して貰えそうだと彼女は感じている。

女の会話は時間がかかる。レミュートとセイラの会話もやはり時間を忘れるほど弾んで、いつしか魔装具の話から最近の旅の話、パーティーの話に大きく盛り上がっていった。

「なんだか随分と話し込んだわね。時間は大丈夫？」

お互いに出す話題も尽きそうになった頃、セイラは話し始めて随分と時間が経ってしまったことを思い出した。

「あ！そうだ、ミリオンを待たせたままだった。」

いつの間にか用意されていたお茶を片手にレミュートは武器屋で待ちぼうけを食らっているであろうミリオンを思い出した。

ミリオンは実に辛抱強い。王宮でも準備に時間がかかった時でも彼は何も言わず、眉すら潜めず、じっとその場で待ち続けるほどだ。だが、王宮では、彼は騎士の立場上表だって文句を言うことは出来なかっただけに過ぎず、王宮ではないこの場においては彼の忍耐が何処まで続くかは定かではない。

レミュートは急いでお茶を飲み干すと、先ほど購入した輝石を布で包み大切にポーチにしまい込んだ。

「じゃあ、またねレミー。また今度、ゆっくりとお茶でも飲みましよう。」

セイラはそういって店のドアを開けた。

「ありがとう、セイラ。とっても楽しかったわ。」

レミュートはそう一言だけ告げると裏路地を急ぎミリオンの待つ武器屋の大通りに駆け込んでいった。

「元気ね。」

去っていくレミュートを見つめ、セイラはほほえみを浮かべ先ほどの会話を思い出した。セイラは魔術士ではないが、その人物がどの程度魔術に従っているかはある程度分かる。

セイラから見たレミュートは、はっきり言ってまだまだ経験が浅くその知識も豊富ではない。それは、彼女が魔術を習い始めて一年半程度であるから当たり前なことだが、彼女が目を見張ったのは彼女の習得の速さだった。

「一年半で既に初歩的だけど実践レベルの魔術を習得しているか。兄さんが聞いたら驚くだろうな。よっぽど優秀な魔術師に師事しているか、それともレミーの才能か。」

そして、彼女はレミーが師事している魔術師の名前を思い出した。彼女の会話で良く耳にしたベルの名にセイラは少し眉をひそめた。

「ベル……ベルディナ……。」

もしもその想像が正しかったら、彼女は今世最大の魔術師の弟子
ということになる。

「まさか・・・まさかね・・・。そんなことはあり得ないわ。」

セイラはそうついて頭を振ると、奥から彼女を呼ぶ父親の声に
応えて工房へと足を向けた。

(5) 準備 ヘルディナ(前書き)

現在：修正第3稿目(2008 09 26)

(5) 準備 ベルディナ

冒険者相手の仕事斡旋所に掲示されていた依頼はどれも似たり寄つたりの内容が殆どだった。

「無駄足かね、これは・・・」

ベルディナはため息をついた。

ベルディナの希望では、出来れば今回は護衛関係の仕事は避けなかった。前回の護衛の仕事は依頼料が他とは比べて羽振りが良かったものの、その報酬は必要経費に消えてしまったことからこの手の依頼で収益を出すことは難しいと考えるのが妥当なところだ。

ならば、なるべく経費がかからずにそれなりの報酬を支払う依頼を探そうとするが、残念ながらそのような夢物語のような依頼は滅多に舞い込んでこないし、舞い込んできたとしても非常に競争率が高くなるだろう。

実力に物を言わせてぶんどってこれる自信はる。しかし、そんなことに労力と時間を割くぐらいなら多少羽振りが悪くてもすぐに応対できるものを選ぶ、というのが彼が今まで通してきたスタイルだった。

ありていに言えば、面倒を省くだけのことだが、今まではそれですまくいつていた。そう、今までは。

一般の依頼掲示板とは別に設えられている王国政府からの依頼を掲示するボードには普段は殆ど何も貼られていないはずだ。

貼られているにしても、それは日雇い事務員の一般公募であったり、書簡の翻訳者を募るもの、予備役の兵士の募集など特に魅力に感じない物が多いが、今は少しその様相が異なる。

そこに貼られている依頼書には大きな文字で、「傭兵求む」と記載されている。その内容は、地方に出没する魔物から村々を防衛することだ。任期は1年以上。王宮からの給料と危険手当が支給されることは戦時中の傭兵と大差ない。

「兵士が不足してるってことか。剣呑な話だぜ。」

募集人員は50人程度だが、掲示されたのはつい先日となっている。

この様子では、短い期間で幾度も募集をかけていることが伺え、おそらく、相当な人員が必要となっていることは明らかだ。

現在の国家の殆どは常備軍を持つ。しかし、平時にはその数は随分と削減され、臨戦時には間に合わせの兵士として冒険者を傭兵として雇うのは当然のこととなっている。ベルディナはそういった戦争に関わったことはないが、傭兵の中でも国家から英雄として認められた者もいることは知っている。

ミリオンなら、おそらくは10年前の戦争を経験しているだろう。10年前、スリンピア王国とガルフィス帝国の境界で起こった小競り合いはそれほどの規模にはならなかったが、スリンピア王家に忠誠を誓う騎士の名家が多く徴収されたことは記憶に新しい。

スリンピア王家に属する騎士の名家、プロミネンス子爵家からもおそらく若い騎士が戦場に送られたはずだとベルディナは予想している。

ミリオンはそのことについてかたくなに口を閉ざすが、おそらくはその戦争で見たくもない現実を目の当たりにしてしまったのではないだろうか。

ならば、相手が例え魔物であったとしても、傭兵として王国の兵になることに抵抗を覚えるのではないか。いや、そもそも名家であるプロミネンス家の嫡子が傭兵となることは実家の方が許さないか

もしれない。

「どちらにせよ、レミーとユアを傭兵にやることはできんか。グリユートに殺されちまうぜ。」

なら、どうしたもんか・・・とベルディナは憎々しげに掲示板を見上げる。その視界の隅に、僅かに彼の興味を引くものが移った。

「荷車の護衛か・・・依頼主は・・・魔法ギルド・・・。」

魔法ギルド。この言葉を口にして彼は自分の胸中に今だ濁りがあ
ることを自覚した。もう随分と経つてのに、俺もなかなか根に持
つね、と自嘲気味に笑うと、「まあ、一度顔を出すのも悪くはない
か・・・。」とつぶやき、鋏で貼り付けられていた依頼書を少しば
かり乱暴に引き外した。

神聖スリンピア王国

神聖スリンピア王国。この王国はこの世界クリーフオにおいて特に重要な国家であることは、言うまでもないことであろう。

かつて、世界が混乱に陥ったとき、彼の王国はその力を持って多くの国家を平定し、現代の安定ともたらした。それは多くの国で語り継がれるように、その功罪を別とすれば、偉大な所行であることは間違いない。

その建国は神話の時代にまで遡り、少なくとも現在確認されている最古の歴史書である『武勇伝、黄昏クリス・ロジャースの魔法剣士』においてかの王国の名は既に記載されている。

一説には、かの英雄クリス・ロジャースが冥竜王グラニトル・メナスを討ち滅ぼした後、彼を王として建国された国こそ現在の神聖スリンピア王国の根源とするものも存在する。

しかし、その後の歴史においてかの英雄が建国したとされる国名は姿を消すこととなる。戦によって滅びたのか、それとただ歴史の表舞台に登場しないだけでその国は確かに存在したのか。それとも、そのような国は最初から存在しなかったのか。現存する歴史書はその答えを与えることはない。

最近になって相次いで発見されたスリンピア王国の周辺の遺跡の多くは、考古学者の調べによるとクリス・ロジャースに由来するものが少なくないという。これは果たして、神聖スリンピア王国がクリス・ロジャースに由来する王国であるのかどうかを示す発見となるのか。今後、更なる調査が必要となるだろう。

(魔法ギルド出版『現代論』、コラムの一部抜粋、著者ベルディナ・アーク・ブルーネス大導師)

(6) 準備 ミリオン(前書き)

現在：修正第2稿目(2008 09 12)

(6) 準備 ミリオン

レミュートと別れ、魔装具屋を後にしたミリオンは武器屋に行く前によっておきたかった場所があったことを思い出した。

ミリオンは大通りの分岐路で一度立ち止まった。レミュートには武器屋に行くと言っておいた手前、寄り道をするのは良くないことだ。しかし、思い出した用事は出来ることなら早く済ませておいた方が良い類の物であるし、今日を逃せばまた暫くここにこれない可能性もある。ベルデイナが調達してくる仕事の内容によっては、出発が明日になる可能性も十分考えられる。

「どうするか・・・」

ミリオンはつぶやいた。あの様子だとレミュートの買い物はまだ暫くかかりそうだ。ならば、用事を手早く済ませたうえで急いで武器屋に向かえば問題ないだろう。

「ならば・・・手早く済ませるとするか。」

そうつぶやき、ミリオンは道を急いだ。

太陽が顔を見せて幾何か時間が経ったといえ、街に流れる空気はまだ早朝の雰囲気を保っていた。一般商店が店を開け始める頃、街はようやく眠りを覚ますほどこの国民はのんびりとしている。人の往来が盛んになるまでまだ少し時間がかかりそうな様子だ。

いかに世界が変わりつつあるうともこの国の民は驚くほど平静を保っている、ミリオンは少し苦笑とも取れる笑みを口元に浮かべた。いや、単に鈍いだけなのかもしれない。とミリオンは思い直した。

ミリオンが生まれ育ち、15歳まで過ごしていたプロミネンスの家はスリンピア王国領の幾らか郊外、辺境とも言える場所に位置していた。周囲を山に囲まれ、深い森がその裾野を覆い尽くす広大な土地は王都の喧噪とは全くの無縁ではあったが、そこに過ごす領民の多く、いや殆ど全ての領民はスリンピアの王都から移住してきた者ばかりだった。

思えばその領民も、周囲の自然の猛威に対して気楽に構えていたように思える。

自然が多く、季節によれば災害もたびたび領地に襲いかかるため決して平坦とは言えない生活だが、他国に比べれば遙かに豊かな国土は人々の感性すらも穏やかにさせるものだと言わなければならない。誰かに教わった記憶もある。

確かに、明日どうなるとも知れない未来に対して人が出来ることが無いのであれば下手に取り乱すよりも自然に構えていた方が柔軟に対応できる上に精神衛生にもよい。

なんだ、結局自分も例外ではないか、とミリオンは滑稽に思った。

王都の中心部は、建国以来その姿を殆ど変えていないと言われている。その建国自体が秘密のベールに包まれているため、その真意は定かではないが、クレア・ライズ・フォントの時代、今からおよそ300年前に記録された街の地図と現在とを見比べてみれば確かに大きく変化した様子はないらしい。

その区画は首都としての機能を重視し、完全に計画された町並みを保ち、小高い丘からそれを見下ろすと非常に整然とした風景が見て取れるだろう。人によっては無機質な印象を抱くそれは、街の利便性と防衛力に優れた作りとなっている。

しかし、中心部より一歩外に出るとそこにあるのは、ある意味泥臭い人々の暮らしによって成長を遂げた町並みが顔を見せる。

どこからか漂ってくる一種独特にすりきれたような香りはまさに下町の風情を説明するにはもってこいだ、ミリオンは少し安心を覚えた。

「やはり、こうでなくてはな。」

ミリオンは三度目のつぶやきを口にすると目的であった建物を見つけ、足早に歩を進めた。

レミュート共に旅に出ていらい、彼はこの街によるたびに欠かさない用事が一つだけある。それは、実に個人的なことであるため仲間にもその内容を話したことはない。

いや、ひよっとすればベルディナには既に気づかれているかも知れないな。とミリオンは思うが、彼がそれを口にしないということはそれなりに気を遣って貰っていることなのだろう。

「いらっしやませ。」

ドアを開くと、静かながら良く通る女性の声がフロアに響く。もっとも忙しい時間帯は既に過ぎているのか、窓口の向こう側には落ち着いた雰囲気広がっている。

ミリオンはなれた足取りで窓口に向かうと、受付の娘に一声かけた。

「入金を確認したいのだが。」

娘は彼をよく知っていたのか、嫌みのない営業スマイルを浮かべると「承知いたしました、プロミネンス様。少々お待ちください。」
と、後ろの棚の書類を調べ始めた。

スリンピア王国においてプロミネンス家の名は比較的有名である。プロミネンス家はスリンピア王国の辺境に領地を持つ下級貴族ではあるが、歴代多くの優秀な騎士を輩出する名家としてスリンピア王家からは大きな寵愛を受けている。

ミリオンも伝統と歴史のあるプロミネンス家に生まれたことを誇りに思っていた頃もあった。

そして、本家の伝統に背を向け、自由な旅人としての人生を選んだ今に僅かながら後ろめたい想いも確かに存在していた。

「確認いたしました。ミリオン・ラスラ・プロミネンス様。確かにグラジオン王国王家様より入金されております。」

ミリオンは、その明細を受け取り僅かに苦笑を浮かべた。

一年と半年前、ミリオンはグラジオン王国騎士を辞する覚悟でレミュートについていく決意をした。それは当然ながら王国に対する不義理であり、本来なら極刑に値することも承知していたつもりだった。

しかし、旅立ちよりわずかして彼がスリンピア王国銀行にもつていた自分の口座を見て心底驚愕した。

そこには、確かに僅かではあるが、グラジオン王家から騎士としての月ごとの給与が振り込まれていたのだ。

何かの間違いだろう、と思い彼は、少しばかり躊躇したが、王国に確認をとった。返ってきた書簡が国王直々の親書であることにも驚いたが、何よりもそこに記されていた内容だった。

「王国騎士ミリオン・プロミネンスは諸国巡幸にある王女レミュート・アンフライン付きの騎士であり、その籍はグラジオン王国にある。何ら問題なし。」

とのことだった。それはレミュートの旅が王国によって認められ

たということの証明でもあった。「陛下に借りを作ってしまった。」と恥じる傍ら、彼は自分に何が起きてもしミュートを守らなくてはならないと改めて決意をした。

「確認した。給与の7割をプロミネンス家に入金するよう手配して欲しい。」

それが、ミリオンの出来る本家へのせめての義理立てだった。

「承知いたしました、ミリオン・ラスラ・プロミネンス様のご口座より、プロミネンス家本家様のご口座へ142ソート561ソートの送金をいたします。では、こちらの書面にサインを。」

ミリオンは一応その文面を確認するとうなずいてサインを施した。これで用事は済んだ。

「ご利用ありがとうございました。今後とも私どもの公社をご贖員にお願いいたします。」

ミリオンは、一言礼を言うと足早に銀行を後にした。

彼は王宮に勤めている頃からこうして給与の何割かを実家に送金していた。彼の実家は彼からの仕送りを求めるほど貧しいわけではない。確かに資産となる宝物があるわけでもなく、領地もそれほど広くないため得られる収入は多くないがスリンピア王国から毎年与えられる資金は潤沢で贅沢さえしなければ十分満足な生活が送れる。ミリオンは、これは本家に対する義理立てだと考えていた。彼が自立するまで自分を育て、多くの技を授けてくれた実家に対する感謝の形といってもいい。

そんな彼がグラジオン王国を捨てて旅に出たと知ったプロミネンス家は、おそらく大変な騒動になっただろう。その詳細を彼は知らないが、今もこうして旅を続けていられる以上だれかが本家の人間を説得してくれたと言うことだ。

そして、彼が知る以上そんなことをしてくれる親類は一人しか思いつかない。カナン・レミア・プロミネンス。彼の尊敬する姉だ。

「姉上には迷惑をかけた。いつか借りを返さねばならんな。」

いつしかプロミネンス家に帰ることがあれば、その時は姉を全力で助けよう。ミリオンはそう誓い、街を急いだ。

(7) 準備 ユア(前書き)

現在：修正第2稿目(20080912)

(7) 準備 ユア

「いい天気。」

泡まみれの両手を冷たく澄んだ水で洗い流し、ユアは空を仰ぎ見た。穏やかな海風に舞う白いシャツが空の青さと相まってとても気持ちがいい。

この分だと後数刻もあれば洗い物もみな乾いてくれるだろう。太陽の光をめいっぱい浴びてふかふかになった服に袖を通すのは今からとても楽しみだ。

ユアは、風にひらめく仲間達の服を見てにっこりと笑うと、薄手の白いワンピースの裾を軽く叩き、洗濯用具の後片付けに入った。

「女将さん。お洗濯終わりました。洗い桶とかここに置いておきますね。」

ユアは納屋の前を掃除していた宿屋の女将に一声かけると、洗濯板と洗剤を一緒にした桶を納屋の入り口近くにおいた。

「あいよ。お疲れ様、ユアちゃん。悪いね、シーツの洗濯もさせちゃまって。」

ユア達がいつも利用するこの宿は、現在人手不足なのだ。本来なら女将の他に主人と彼らの息子夫婦の四人で切り盛りしているのだが、女将の話によると主人と息子は遠くに出稼ぎに出ていて不在らしい。

だからユアは滞在中はせめて出来ることを手伝いたいと思い、仲間の着る物の洗濯ついでに宿の洗濯物も引き受けることにしたのだ。

「他に何かすることはありますか？」

ユアは、「ふう・・・」とため息を一つつくと、女将に次の仕事を聞いた。

「後は昼のご飯の用意だけだからもういいよ。洗い物をしてくれただけで大助かりさ。」

「分かりました。じゃあ、中で休憩させてもらいますね。」

本当なら庭の掃除を手伝いたかったが、生まれてこの方身体を動かすことが苦手な自分が下手に手伝ってもじゃまになるだけかも知れないと思い、ユアは休憩をすることにした。

「あいよ、お疲れさん。」

ユアはぺこりと一礼すると風に流される長髪を押さえつつ建物の中に引っ込んだ。

「お洗濯は終わったから、もうやることはないよね。・・・久しぶりに占いでもしようかな。」

そういえば最近、何か物足りないと思っていた彼女だが、ここ一月ぐらいカードに触れていなかったことを思い出した。彼女の唯一の趣味である占いだだったが、一月もの間触れることもなかったほど忙しかったのだろうかと考えるとあまりにも様々なことが思い出されてよく分からなかった。

「まあいいや。」

ユアはそういつて雑念を払うと、自室にカードを取りに戻った。自室に戻ったユアは、はやる心を抑えず急いで荷物を探った。

さっきまで女将さんに手伝いを断られたが、それでも自分に来ることはないかと思っていたのが占いを思い出したとたん居ても立ってもいらなくなってしまうていた。

占いを始めたのは何がきっかけかは忘れてしまったが、6歳の誕生日にベルディナからタロットカードをもらっていたらしいその虜になっていた。王国にいた頃は、それこそ様々な占いを勉強したものだ。カード占いだけでなく、水晶を使用した占いや、占星術にも手を出し、自分が一つのことになんか熱中できることを知って驚いたこともあった。

さすがに旅をするのに重くかさばり壊れやすい水晶玉を持ち出すわけにはいかなかったが、荷物に忍ばせても問題ないこのカードだけは持ち出していた。

これは、彼女にとって思い出の品であり、生涯の宝物にしようと心に誓ったものだった。

カードは暫く使っていなかったわりには見つけるのに時間はかからなかった。

ベルディナからもらっていたらしい十年以上使っているにもかかわらず、カードは折れたり曲がったり目立つ傷もついていない。占いに使うカードは使ううちに使用者の魔力が宿るものだと言われている。ユアが大切に思う気持ちがあるに反映されているのか、ベルディナが彼女に贈るさい予めそういう魔術をかけていたのか。そればかりは分からないが、カードはとても綺麗な状態で保存されていた。

ユアは、木箱に収まっているカードを手に取り、特に不足もなさそうだと確認すると木箱の蓋を閉じ、側に入れておいたデータシートを小脇に抱えると部屋を見回した。

洗濯をする前に軽く整理したが、それでも部屋は何となく雑然としている気がした。備え付けの小さなテーブルを見ると、少し先の

欠けたナイフや使い差しの魔装具などが無造作に置かれている。おそらくレミュートが何かの作業の途中でそのままに置いていったものだろう。

「レミューはもう少し整理することを覚えないと。」と彼女は思ったが、作業の途中のものを動かす気にはなれず、占いは談話室ですることにした。

少し出鼻をくじかれた感じがしたが、談話室の隅のテーブルでカードをシャッフルし始めるとそんなことはすぐに頭から消えてしまった。

どういう占いにしようかな。とユアはカードを混ぜながら考えた。占いを使用と思い立ったはいいが、何を占うかどういう形式にするかは全く考えていなかった。形式によればとても緻密な下準備が必要なものも多い。星図ホロスコープを作成した上で占星術の手順に従って展開していく天球法などがその最たるものだ。星の力を直接使うその占法はもつとも信頼性のある占いの一つではあるが、展開する時の詳しい天球図を作成する必要がある。また、未来予知を行う場合には目標となる時の天球図も用意する必要がある。また、占星術に乗っ取った展開法は酷く難解な古代語による呪文を必要とし、その言葉の意味も正確に理解しておく必要がある。しかも、何処で行ってもいいというわけではなく、展開する場所を適切に選ばなければ、真逆の結果が生じたりする。

とてもではないが、空き時間に行えるものではなく、しかもそれには結構な魔力を消費する。

。 だったら、多少精度は落ちても手軽に行えるものにするべきか・

ユアは暫く思案するが、

「まあ、いいか。十二区分法にしよう。」

とって十分にシャッフルしたカードをまとめた。

カードの数は22枚。本来ならカードは78枚で成り立っているが、その中でも特に力の強いカードがいま彼女がもっている22枚のカードだ。このカードは、「エルカード二十二祖の世界要素」と呼ばれるものでそれぞれのカードに特別な意味合いをもつ。

ユアは、まとめられたカードを適当なところで三つに分けると、それらを縦に並べた。そして、分けられた三つの山からそれぞれ無作為に四枚のカードを抜き取りその横に並べる。テーブルには縦三行、横四列、計十二枚のカードが並べられた。

術者からみて手前の行から順に過去、未来、現在を表しそれぞれに配置されたカードの絵柄からそれぞれの時の状況から未来を占うものである。

ユアは順番に過去から現在のセルに配置された四枚ずつ、計八枚のカードを表返した。

「過去、ロープ・オブ・クラウドキックスル・オブ・ヘヴン大地の衣、オブ・セントナイト・オブ・クレセント天の楼閣、オブ・セイントナイト・オブ・クレセント聖者の灯火、オブ・クレセント新月の夜……」

ユアの脳裏に旅立つ時の情景が蘇ってきた。ミリオンと共に行くと言言したこと、レミュートの強い意志を感じた時だった。

「現在、ガール・オブ・フェザードクネス・リレイテッド翼の少女、オブ・サンダータワー・オブ・フォーチュン闇の眷属、オブ・サンダータワー・オブ・フォーチュン落雷の平原、オブ・サンダータワー・オブ・フォーチュン運命の塔……」

そして現在、自由な旅人としてどうにもならない現実を憂う。悲しい知らせと変わっていく世界を感じ、はたして自分に何が出来えるのか。

そして、未来。未だ見ぬ現実。現在の先にはいったい何が待つか。

ユアはその中心にある未来のセルを手にする。ここに記されるのはこれより未来を映す鏡だ。

「未来・ブレイヤー・オラ・チャベル・ベイス・オブ・ドサゴゼット・オブ・キングダム教会の祈り子、竜の礎、王都の落日、・そして・・・」

その最後の札をめくるユアの手が震えた。
そして、最後の札が開かれた。

「エグザヴァイサー・・・・大いなる聖剣・・・」

ユアは息をのんだ。もしも、これが私たちの未来だとしたら・・・ 私たちは・・・」

「ユア。」

自分と呼ぶ声、ユアの心臓は跳ね上がった。

「ど、どうした？具合でも悪いのか、なんか顔色が思わしくねえな。」

いきなり飛び上がったユアに驚いたのは、むしろ彼の方だったのかも知れない。

「べ、ベル・・・。帰ってたの？」

ユアは肺のそこから息を吐き出した。高鳴っていた心臓が納まっ
ていく。

「ああ、このとうり。で、どうした？占いをしてたのか？」

ベルディナはユアの目の前に広げられたカードを見た。正直ベルディナは占いのことに関しては素人に近かったし、興味もなかった。それならば、なぜ彼女にこのカードを贈ったのかと問いただしたくなるが、答えは友人の薦めに従っただけというあまりにも味けの無いことだったらしい。もちろん、これはユアには内緒のことだ。

「うん。久しぶりだったから。」

ユアは改めて深呼吸をし、額に浮かんだ汗を拭った。背中や胸に張り付く汗は、春のような陽気にあてられただけが原因ではないだろう。ユアはそれを不快に感じ、風呂に入りたくなった。

「そうか。何か悪い結果でも見えたのか？」

「ううん。悪くないと思う、むしろ・・・本当にこれが私たちの未来なら・・・きつと・・・。」

ユアはその先を言えなかった。そして、ベルディナも落ち込んだ様子を見せるユアにそれ以上のことを聞けなかった。

沈黙が二人の間を支配する。

ユアは手早くカードをまとめると足早に席を立った。

「ごめんね。少しお風呂に行ってくる。」

「朝にも入ってたじゃねえか。またか？」

「うん、少し汗かいちゃった。」

「相変わらずきれいだな、お前は。昼飯までには上がってこい

よ。」

ベルディナも立ち上がると、談話室においてあるティーセットを引き寄せた。

「うん。それじゃあ、後でね。」

ユアは槍言い残すと着替えを取りに庭先に出た。

ベルディナは茶葉を適当にポットに入れるとまともに湯温も確かめずに注ぎ込み、茶葉が開ききらないうちにカップに注いだ。酷く濁ったそれは、お世辞にも上手そうとは思えなかったが、ベルディナはかまわずそれを飲み下した。

「ロープ・オブ・グラウキキッスル・オブ・ヘンシグ・オブ・セイントナイト・オブ・クレセガトル・オブ・フェザダーケネス・リレイ大地の衣、ティフスブレイン・オブ・サンダータワー・オブ・フォーティライヤード・オブ・チャベル・ヘイス・オブ・ドゥンセット・オブ・キングダム天の楼閣、属、落雷の平原、運命の塔。聖者の灯火、教会の祈り子、竜の礎、王都の落日、新月の夜、翼の少女、闇の眷翼の少女、・闇の眷属、・落雷の平原、・運命の塔、・教会の祈り子、・竜の礎、・王都の落日、・・そして・・・。」

ベルディナはそこまで口ずさみ、少し乱暴にカップをソーサーに置いた。それはまるでたたきつけたかのような甲高い音を響かせ、周りにいた他の宿泊客の視線を集めたが彼は気にする様子はなかった。

「エグザヴァイサー・・・大いなる聖剣・・・か。」

（大地の衣を身に纏いしそのものは、新月の夜、聖者の灯火をもとに天の楼閣を目指す。

翼を得た少女は落雷の平原に降り立ち、闇の眷属の待つ運命のとうに挑まんとす。

はたして教会の祈り子は王都の落日と共に竜の礎を得、大いなる

聖剣を手にするであろう。」

「（それが俺たちの運命だとしたら。俺は・・・いったいどうする
というのか。また、逃げ出すのか？）」

空高く太陽の光を讃える晴天の日にもかかわらず、彼の背後には
まるで冬の日のような寒々しい風が駆けめぐったようだった。

(7) 準備 ユア(後書き)

占いに関しては全くの素人である私が、何とか苦心して設定を作ってみました。それに関するご意見をお待ちしております。

(8) 夕食後

昼食後部屋に籠もってしまったユアのために、レミュート達はそれぞれの報告を夕食後に持ち越すこととなった。

「ごめんね。」

夕食後ベルディナとミリオンの部屋に集合した仲間達に、顔を合わせるなりユアはそう詫びた。

昼頃にユアが占いをしていたことをレミュートとミリオンは知らない。ユアはそのことに関しては何も言わなかったし、ベルディナは彼女がそうするのなら何の口出しもしないという立場を貫いた。

ミリオンはユアが言いにくそうに顔を伏せるのを見て、それ以上聞き出す気にはなれなかった。

ベルディナはそんな二人を横目で見ながら、昼間に仕入れてきた仕事の話に移ることにした。

ミリオンは、昼間にベルディナが買ってきていた安いウイスキーを自分とベルディナの分をグラスにつぐと、静かにそれに耳を傾けた。

ベルディナの話はそれほど長いものにはならなかった。入っていた依頼の種類は相変わらずで、変わったことといえば王国政府から傭兵の募集がされていたこと。ミリオンはそれを聞いて少し苦い顔をしたが、ベルディナはそれに気がつかないふりをし話を進めた。

「結局、また荷馬車の護衛ってことになるのね。」

レミュートはため息混じりに聞き返した。ベルディナの言葉は聞き返す必要もないほど明瞭なものだったが、レミュートにはそれが

重々しく感じた。

「まあ、そういうことだな。こればかりはどうしようもねえ。」

ベルディナにも今のレミュートの気持ちはいたいほど理解できた。実のところベルディナも同じ気分だったからだ。

「対策を立てるべきだが。こればかりは私たちではどうしようもないな。」

仕事は依頼主が依頼を持ち込まないことには成立しない。故に、まともな依頼が無くとも彼らのような冒険者にはどうしようもないことだ。それが嫌なら冒険者を止めて別の仕事を探せ。それが出来ないなら文句を言っな。

活躍の場を与えられずくすぶる若い冒険者に、ミリオンとベルディナは何度もそんな言葉を投げかけた覚えがあった。それはずいぶん前、彼らが世界を巡る旅をしていた時のことだった。

「今更ながら憎々しいことだぜ。先方との交渉も済んだ。出発は明日の明朝、夜明けと共に王国を出る。俺からは以上だ。他に何かあるか？」

ベルディナはそういうと三人の目を順番に見た。他に発言するものはいない様子からベルディナはそこで話を切り解散となる。

レミュートは入浴後ミリオンとベルディナに鍛錬の約束を取り付けることとユアと一緒に部屋を出た。

「それにしても、昨日ここについたにも関わらず明日にはまた旅立ちか。忙しいものだ。」

ミリオンは、さういうとグラスに残ったウイスキーを一口で飲み干した。

「全くだぜ。これじゃ、ゆっくりとカジノにもいけやしねえ。」

カジノに行くような金もないだろうに、と思うミリオンはそれを言葉にはしなかった。聖王都では王国が管理する国営カジノが街の外れに建っている。それは、貴族のみではなく一般市民でも気兼ねなく立ち寄ることが出来る場所であり、国民の娯楽施設の一つと位置づけられている。国家は国民に娯楽を提供する代わりにその収入から税金を得ている。故に、カジノで金を落とすということは国家に対する貢献でもあるが、近年になってカジノに依存する人間や博打で多くの借金を作り破産する人間も出てきているため国民からは賛否両論がわき上がったということだ。

ベルディナは金に余裕のある時には良く国営カジノに足を運ぶが、持ち金が増えたという話は全く聞こえてこない。まあ、勝ったとしても、帰りがけの酒代で勝ち分以上の出費をしているだろうから同じことか。

ベルディナはミリオンに酒の追加を薦めるが、この後の鍛錬のことも考え遠慮することとした。ベルディナもそれ以上飲むつもりはないらしく、グラスを傾けながら最後のそれをゆっくりと咽に流し込むと酒瓶を鞆にしまい込んだ。

こういった強い酒は晩酌以外にも傷口の消毒や気付け薬としての効果を始め、周囲に散布することでそれを苦手とする猛獣や魔物から身を守ることも出来る。また、ある程度煮込んでアルコールのみを蒸留した場合は一時的に強力な燃料としても使用できるため旅には重宝する。

もっともその半分近くがベルディナとミリオンの腹に納まること

となるのだからそれは明らかに言い訳のために考えられた理由だろうと想像できる。

酒に煙草に博打。まあ、こんな人間（実際はエルフ族ではあるが）が世界では大導師として崇められているのだから不思議なものだ。ミリオンはベルディナという人間を知れば知るほど、世間で言われているベルディナ・アーク・ブルーネス大導師像が薄っぺらいものと思えてしまうようになった。

「ところで・・・。」

ミリオンはグラスを置くと、椅子の背もたれに背中を預けた。

「ユアはいつたいどうしたのだ？あの様子だと何かあったのではないかと思うのだが。」

「・・・あいつが何も言わない以上、俺から言えることはねえよ。」

「・・・そうか。」

ミリオンはうなだれた。ユアが自分に何も言わないこともショックだったが、それ以上に自分が知らずベルディナがその事情を知っていることに僅かに嫉妬した。

「といっても、俺も何故あいつが口を紡いでいるのかはしらねえんだ。ただ、昼頃にしていた占いで何かあいつの琴線ふれる結果が出たのだからうってことしかな。」

「占い・・・そうか。あのとときと同じなのだな。」

ミリオンは、一年半前の王国で起きたことを思い出した。そして、

レミュートを除く彼らにとって旅立ちの原因ともなったことだった。
「大地の衣を身に纏いしそのものは、新月の夜、聖者の灯火をもとに天の楼閣を目指す。翼を得た少女は落雷の平原に降り立ち、闇の眷属の待つ運命の塔に挑まんとす。はたして教会の祈り子は王都の落日と共に竜の礎を得、大いなる聖剣を手にするであろう。」

「なんだ？それは。」

「ユアの占いの結果だ。」

「どういう意味なのだ？」

「こればかりは、占った本人にしか分からん。タロットカードで占っていたようだが、その印象を正しく言葉に出来るのは本人だけだ。」

「なるほど。術者でもない私たちがその言葉を聞いただけでは意味がない、ということか。それにしても・・・やっかいなものだな、占いというものは。」

ミリオンは手持ちぶさたに宙を仰ぐ。ベルディナは既に煙草を吹かしている様子だった。旅の間には吸わないような、甘いバニラの香りのする少し良い葉巻のようだった。

「また、剣と竜だ。」

紫煙と共に薄く吐き出される白煙の内側でベルディナはそうつぶやいた。

「・・・さて、そろそろ鍛錬の準備をしておくでしょう。」

ミリオンはベルディナのつぶやきをきかなかったことにした。その先を知ってしまえばおそらく平静でいられなくなるだろう。これから鍛錬をするにあたってはそれは避けておかなければならない。ミリオンはそう自分に言い訳すると部屋の隅に立てかけておいた自

分の剣を取り上げると部屋を出ようとした。

「俺も後で行く。先に始めておけ。」

「了解した。では。」

「ああ、後でな。」

ドアが閉まる音を確認し、ベルディナは一つ、大きなため息をついた。

「お前が逃げたくなる理由も分かる。俺もそうだ。だがな・・・、
いずれはそれに突き当たることとなる。それまでに答えを用意して
おけよ。俺も、お前もな。」

(9) 夜 レミュートの鍛錬

乱れた吐息が静寂な夜の街に響く。張り詰めた緊張感がとぎれると、手足はまるで糸の切れた傀儡人形くわいごのようにその場に崩れ落ちた。どくどくと身体を巡る血流の激しさは心臓を打つ早鐘となって身体を厳しく律するようだ。もっと空気をよこせという身体に対して与えてやれる空気は自分の肺の容量を超えることは出来ない。まるでからだがいっことを聞かなくなってしまったように思えて何とも言い難い悔しさを感じる。

「まあまあ形にはなってきたな。」

建物の壁に背を預けて煙草を吹かすベルディナがそんな彼女のさつきまでの剣合をみてそうつぶやいた。

「剣筋も随分と鋭くなってきた。身のこなしがようやく板についてきたといったところか。」

先ほどまでレミュートと剣を合わせていた剣士、ミリオンは特に息を乱すこともなく練習用の木剣を肩に背負いながら額に僅かながら浮かぶ汗を手でぬぐい去った。

少しばかり息も荒くしているが、彼の目の前で膝をつくレミュートに比べると準備体操を終えた程度のものだ。

「だけど・・・全然・・・ミリオンには・・・とどか・・・なかった。」

レミュートは息も絶え絶えに言葉を吐き出すと、剣を手放しその場に仰向けにひっくり返った。

「まだまだ身のこなしに無駄が多い。剣と魔術を併用するならなるべく体力の浪費は押さえることが大前提となる。」

「だがまあ、剣に集中しながら魔術が使えるようになったことはいい進歩だな。一年半でここまで出来るようになるのは正直驚きだ。」

そういうとベルディナは煙草の火を消すと壁から背を離すとレミュートの元に歩み寄った。ミリオンは、それを見ると剣をしまい苦笑を浮かべる。どうやら、ベルディナは彼女を休ませる気はないらしい。今度はミリオンが壁にもたれかかる番になったようだ。

「立たなくてもいい、とりあえず身体を起こせレミー。鍛錬はまだ終わっちゃいねえ。」

「はあああ……。ふうふうう……。分かった。」

レミーはいうことを聞かない両の腕を何とか奮い立たせて半身を起こした。

ベルディナはそんな彼女の視線に合うようにあぐらをかいて座り込むと手を胸の高さほどに掲げ、その指先に淡い光の球を一つ生み出した。

何のことはない、魔術師が最初期に習得する最も簡単な魔術だ。

レミュートも彼が何も言わない間に、彼と同じように手を掲げ指先に青い光を生み出した。息も絶え絶えだが、彼女の指先にともる光は実に安定している。ベルディナはそれを見て気分を良くすると早速鍛錬にはいることとした。

ベルディナやミリオンが良く口にするように、レミュートには剣

術よりも魔術の方に強い適性がある。それもベルディナの見立てでは相当強い適性が、魔法ギルドに入信など使用ものなら数十年に一度の逸材だと重宝されるほどのものだといふらしい。しかし、その話を聞いてもレミュートが剣術に対する思い入れを変えることは出来なかつたようだ。

そんな彼女が魔術を習い始めたことには理由がある、それはベルディナのこんな言葉、それは半ば挑発のようなものだったがその言葉はレミュートの心の深くをついた。

『お前が剣術だけでミリオンに勝つことはおそらく一生かかっても不可能だろう、かといって魔術だけでは俺に勝つことは何百回生まれ変わったとしても絶対に不可能だ。ならばどうするべきか考えてみな。』

その言葉にレミュートは怒った。それこそ暫くベルディナと口をきかなくなるほど彼女は憤慨した。自分でも分かっていることをわざわざ口にされるということは誰にとっても面白いことではない。

だから、レミュートは考えた。ベルディナの思惑通りにことが進むことは実にしゃくだったが、それでもいずればベルディナを見返してやるつもりで真剣に考えた。それこそ水と間違えて調理酢を飲んで気がつかないほど真剣に考えた。そして、考えれば考えるほどベルディナが口にしたことは実に正鵠を射ていることに気づかされるばかりで落ち込んだ。

それでも、将来あの二人と肩を並べるためにはどうするべきなのか、そして至ったのは単純明快な答えだった。片方を用いても二人に勝てないのなら、その両方を用いれば何とかなるのではないか。

そして、彼女が選んだ道はミリオンとベルディナの両方に協力を求めた。

それが、彼女が剣術の鍛錬でへとへとになりながらベルディナから魔術の指南を受ける理由である。

「少し光量が強すぎる。もう少し供給を少なくしてみる。あと、色を青から緑に。」

レミュートはベルディナと自分の指先にとる光の粒を見比べた。いつの間にか一本から三本に増えている指先には赤、青、黄の光がともされている。確かに自分の指先の光は彼の光比べると少し明るすぎるように見える。そして、ベルディナは中指の青の光を光量を変えず緑に変化させる。

レミュートは集中し、とりあえず全体の光量を抑える方向に魔力を調整する。

光の光量はそれに供給する魔力に比例する。また、その色彩は属性に比例し、炎のイメージを送り込むと光は赤に、水は青、大地は黄色、緑は風に相当する。そして、その光の粒子の大きさは供給された魔力の密度に比例するとされている。

実際、ベルディナはレミュートに対しては一般的に行われている鍛錬とは全く異なる鍛錬を施しているのだ。通常であれば、魔術はより多くの呪文を覚え、より多くの魔術を使用できるように教えられる。それは、多彩な呪文や魔術を習得することで更に複雑で強力な魔術を習得する土台とするためだ。たしかに、一般的な魔術師であればそれがもっとも適切な修練であることはベルディナも認めている。

しかし、レミュートに関してはそれも当てはまらない。

「色彩が淡いな。もう少し緑のイメージを強く。他と混ぜらないようにな。」

レミュートはそれに答える余裕はない。今、こうして現状を維持することが精一杯で口を動かすほどの余力が残されていない。

ベルディナほどの魔術師であれば、色彩をワンアクションで変化

させることが出来るだろうが、レミュートは色彩を変化させるためには一度それを透明な光に戻すというワンクッション置かなければ変化させることは難しい。

ミリオンはあくびをついた。修行をしている人間を見てあくびをすることは礼儀に反しているだろうが、彼らの修行は見ていて非常に地味で退屈なのだ。しかも、具体的に何か効力のある呪文を使用しているわけではないため彼にはレミュートがどの程度魔術を使っているかを測ることは出来ない。

「よし。もう一本増やすぞ。小指に光量そのまま色彩は青。」

それまで人差し指、中指、薬指だったものにそれぞれ折り曲げていた小指を伸ばすとその指先に青の光を生み出した。

これで合計4本。

ベルディナは全く涼しい顔をしてその四本の指をヒラヒラと動かしてみせるが、分かるものが見れば驚愕するかも知れない。

何せ、これを一般的な魔術に例えて解釈すると、一度に四つの呪文を同時に、さらにそれぞれ属性の異なる魔術を長時間持続して（もともと消費する魔力は微々たるものだが）行使していることと同じことなのだ。それも、殆ど意識する必要もないほどに自然に。

レミュートは、小指を立てその指先に集中するイメージは青、光が指先に明滅する印象をイメージしてひたすら意識する。しかし、小指に意識しすぎずその半分は残りの三本に置いておく。光量を変えず色彩を揺らさず、常に一定に保ち新たな光を意識する。

小指の先にようやく灯りはじめた青の光はその光量が安定するより前に他の光と共に霧散し始めた。

レミュートは、しまったと心の中で舌打ちし霧散し始めたイメージをかき集め何とか安定させようとするが消えていくそれをせき止

めることは出来ず、ついに指先から全ての光が消えてしまった。

「あー……。」

レミュートはそう叫ぶと両手で顔を覆いつつむいた。

「今のは惜しかったな。もう一度出来るか？」

それに対してベルディナは、指先に四つの色の異なる光をともしながら煙草を取り出すと火をつけた。

「ごめんなさい。少し休ませて。すこし、集中が切れちゃって。」

先ほど迄の修練は剣術と違い体力を消耗するものではない。実際、剣の鍛錬で疲れ切った身体にとってはほどよい急速になっただろうが、魔術の修練はとにかく精神を消耗する。しかも異なる属性の呪文を三つも同時に行っているのだからその集中力は並大抵のものではないだろう。

ベルディナはそれを許すと、さっきまで指先にもしていた光を宙に投げると、頭上より拳一つ分ほど高い位置にそれらを偏角の異なる円運動をさせた。それはまるでベルディナの頭上に色とりどりのイリユージョンが球を描いて一つとなっているようで、正直シュールな光景だった。

ミリオンは修練が一区切りしたことを見計らって二人に飲み物を渡した。

ベルディナの魔術で適度に冷やされたそれはすつきりとしたハーブの香りを漂わせ、疲労した身体にはごちそうとなった。レミュートはそれを一気に飲み干すと、ようやく一息つくことが出来た。剣術の稽古から魔術の修練まで二刻ほど集中しっぱなしだった彼女は

思いの外疲労していた様子で、そのまぶたは今にも張り付きそうな程接近していた。

「だいぶお疲れのようだな。」

そんな彼女の様子にミリオンは感心すると自分も彼らの側に腰を下ろした。

「まあ、仕方ねえだろうよ。普通ならとっくに意識を失っててもおかしくねえな。」

ベルディナは、頭上の光の粒を適当に増やしたり軌道を変えたり色を様々に変化させたりしながら嬉しそうに笑った。

「頭痛はしねえな?」

「うん。大丈夫。今日は平気みたい。」

それでもこめかみを押さえている辺り全く大丈夫というわけではなさそうだが、それでも大したものではないのだろう。初めてこの鍛錬を始めた時には酷い頭痛が朝まで続いたというのだからこれは大きな進歩だと言える。

「それで、どうなのだ。レミーの修練の度合いは。」

ミリオンからしてみればこのような地味なやり方ではたして効果が出るのかどうか疑問だったが、ベルディナの表情を見れば悪くないものなのだろうと予想が出来る。

「上々といったところだな。この分なら次の段階に進んでもいいくらいだろう。」

普段は殆ど人をほめることのない彼の口からそのような言葉が出されたということは、レミュートの練度は相当高まってきているという現れなのだろうとミリオンは予想した。

「しかし、この修練で何が得られるというのだ。私にはそれが理解できん。」

ベルディナは「まあ、仕方ねえよな。」と言って苦笑を浮かべると、頭上の光の群れを集め一つの白く輝く光に変え、手のひらにのせると、それを握りつぶすように徐々に魔力を霧散させた。

「今やっていることは、魔力の運用についての修練だ。」
「フム。」

レミュートはそんな二人の会話を黙って聞くことにした。さつきまでこめかみを襲っていた軽い痛みはハーブの香りに相まって徐々に治まっていつている。

「そもそも、魔力の運用方法はどんな低位の魔術でもあらゆる高位の魔術でも重要なことだ。特に複雑な魔術になればなるほどそれを完璧に扱えなければ話にならない。これは分かるな？」

ベルディナの言葉をミリオンは自分なりの解釈で租借し暫く口をつぐんだ。

「つまり。光の強さと色を思いのままに制御することで魔力運用を完璧なものとする。ということか。」

「」名答、さすがミリオン。自身のイメージを確かかつ完璧に魔力

放出として出力できるようになれば、あらゆる魔術の修練の六割が終わったも同然だ。俺にしてみればもつとも単純な魔術でそれが習得出来るなら、変な癖がつく前でやっておかないでどうするってところだな。」

「つまり、君にとってはもつとも効率の良い初期段階の修練というわけか。」

「そういうことだ。まあ、一般には認められてねえ方法ではあるんだがな。」

「ご高名なベルディナ大導師のおっしゃる言葉だ。疑ってはいない。」

「嫌みか？それは。」

「分かるか？」

二人は口元に邪悪な薄笑いを浮かべながら相手を牽制し合うが、レミュートの目には仲の良い二人が言葉巧みにじゃれ合っているようにしか見えず、思わず声を上げて笑ってしまった。

ミリオンとベルディナはそんなレミュートの様子に少しばかりあつけにとられていたが、いつの間にかそれにつられて笑い出していた。

漆黒に染まる大地の下で、黄昏の支配に置かれた世界にあっても彼らの笑い声は暗黒の空を明るく染めるように思えた。

そうして、彼らが穏やかでいられる最後の夜は静かに幕を引いた

(10) 平穏な道中

「……わりと平穏なもんだな。」

そう呟くベルディナは手元のカードから1枚のカードを選ぶと場フィールドに捨てた。

「そーねー。」

それに相づちを打ちながら山からカードを1枚引くと難しそうな表情を浮かべた。

「いいことだと思っよ。」

ユアは、暫く長考していたレミユートがカードを捨てたことを見て、今まで全員が捨てたカードを眺めると、自分も一枚カードを引くとすぐにそれを捨てた。

「私としては少し肩透かしを食らった気分だがな。」

そろそろ終わりが近いな。と、ユアが捨てたカードを見てミリオンは感じると、彼も先ほどユアが捨てたカードと同じものをフィールドにさらした。

スリンピア王国を出立して既に1日が経過していた。魔物の数が激増しているためか、魔法ギルドへ向かう街道には行き交う人の数が殆ど見られない。

先日は、一日中魔物の襲撃に警戒し常に緊張感を巡らせていた彼らだったが、そのあまりの平穏さに今日になってというものその緊

張感はなりを潜めている。

先ほど泉に近い場所で昼食をとったばかりなので、全員先日の緊張感もあり相当な睡魔に襲われていた。さすがに全員で昼寝をするわけにもいかず、ベルディナの提案でカードゲームをすることになった。

ユアがいつの間にか入れたお茶を片手に彼らは、この日常的な平穩をかみしめつつ僅かばかり心に残る不安を隠しながらゲームに興じていた。

「あ、ベル。それ、当たり。」

ベルディナの捨てたカードを見て満面の笑みを浮かべたレミュートは、そういうと手持ちのカードを場にさらした。

「ああん!？」

ベルディナは仰天して思わずひっくり返りそうになると、レミュートの手札を確認しようと思身を乗り出した。

「悪いが、私もだ。」

ミリオンも手札を公開する。どうやら、ベルディナの捨てた最後のカードは二人にとっての上がり札だったようだ。

「ダブルかよ。まさか、ユアもなんていうじゃねえだろうな？」

まさかそんなはずは・・・と期待しつつ彼女の表情を確認したベルディナの表情は青ざめた。

「ごめんなさい。まさか出るとは思わなかったから……。その……」

済まなそうな顔をしてユアも手札をさらす。

「トリプルかよ。つたく、容赦ねえなおまえら。」

ベルディナはそういうと、やってらんねえーとばかりにカードを乱暴に投げ捨てると仰向けに寝ころんだ。

どうやら、払えるものがなくなってしまったらしく、それは同時にゲームセットを意味していた。

このゲームは上がった者の手役に応じて点数がかかれた棒（点棒と呼ぶ）をやりとりするものだが、ベルディナはことごとく支払う立場を全うし、ついにはそれが無くなってしまったのだ。点棒が無くなった時点でゲームオーバーとなり最終的な精算が行われる。

結果的には、レミュートが他者を圧倒し、ミリオン、ユアと続き最下位がベルディナという塩梅に納まった。

それにしても、とミリオンはカードと点棒を片付けながら思った。こういうゲームではその人物の性格がよく分かる。

ミリオンは質実剛健。勝負できる場では勝負し、勝てる目が無ければ完全に引き下がる。

ユアは、そもそも負けられないようにするため勝負をせず守ることを主体とする。

実は、ベルディナとレミュートはその勝負のスタイルはよく似ている。二人とも常にまっすぐ勝ちをめざしあがりにいく。たとえそれがどんな不利な状況でも、彼らは自らの勝利を疑うことはない。

しかし、その結果はレミュートの圧勝に終わることが多い。これは、レミュートの勝負運が強いのか、ベルディナの勝負運が悪すぎ

るのか。ベルディナとレミュートが最後に残る一騎打ちでは必ずといって良いほどレミュートがその勝利を自らのものにするのがよく見る光景となっている。

ともあれ、王族として彼女の勝負運や感といったものは実に心強いと彼は思った。

「そろそろやるのが無くなってきたな。」

ミリオンは、カードをまとめユアに手渡すと、側に置いておいた剣を手に取り暇つぶしがてら手入れをすることにした。

「あ、私のもお願いできる？」

剣の手入れを始めたミリオンを見て、レミュートも自分の剣を彼に差し出すが、

「ふむ・・・、そろそろ君も自分で出来るようになったほうがいいな。」

ミリオンは、それをあえて受け取らず、代わりに手入れの道具を彼女に渡した。

剣の錆をとるヤスリとさび止めの油に手ぬぐいを手渡され、レミュートは少し困った表情を浮かべるが、

「分かったわ、教えてくれる？」

といって、ミリオンの隣に座った。

「むろんだ。私がやるようにすればいい。難しいことではない。」

ミリオンは、そういう彼女学ぶ姿勢に安堵すると手入れを再開した。

ふてくされ、寝転がりながら煙草を吹かし始めていた（器用なものだ：ミリオン談）ベルはそんな二人を見ながら、むくりと起き上がると、煙草の火を灰皿でもみ消した。

「そろそろ馭者と交代してくる。中は任せたぜ。」

ベルディナは、荷物から小振りな書物を取り出すと馭者台に出ようと幌をめくった。

「私も一緒していい？」

そんなベルディナの後ろからユアがおずおずと聞いた。

「ああ、いいぜ。念のために武器も持っておけよ。」

「うん、分かった。」

ユアは微笑むと、普段は荷物にしまつてある小剣を取り出し、腰のベルトに差し込んだ。

彼女の持つ小剣ディムスは、旅立ちの際ベルディナが譲渡した真正銘の魔法剣だ。

彼女は争いには向かず、戦闘時も後方で三人の支援をしつつ負傷者の治療を担当しているが、それでも護身用に何か必要だろうというベルディナの提案からこの小剣を持たされた。

この小剣は、元々ベルディナのコレクションの一つで、古代遺跡から発掘された遺産の一つである。この小剣は、魔力を込めて掲げれば様々な攻撃から身を守る障壁を展開させることが出来、ユアの護身には最適のものである。

余談ではあるが、ベルディナが持つ数本の魔法剣を始め、これら古代遺産である魔法剣は失われた技術（遺失技術：ロスト・テクノロジー）が使用されており、現在では複製は不可能である。

ベルディナが身につけている小剣ラグナ・メルフィス、ベルディナからレミュートに贈られた小剣アーケス、ミリオンに譲渡された小剣レヴィナスもその遺失技術による魔法剣である。

ベルディナは馭者に休憩するように伝えたと、彼から手綱を受け取り、葉巻を一本手渡した。

「それでは大導師、私は休憩させていただきます。」

ギルドからお使いを言い渡された見習い魔術士である馭者は、彼に一礼するとユアと入れ替わりに馬車の中へ引っ込んだ。

「魔術士さんも、こんなことをしなきゃいけないなんて。大変なんだね。」

ベルディナの隣に座ったユアは、風に靡く白銀色の髪を押さえながら眼前に広がる山々を眺めたため息をついた。

「ギルドは基本的にけちだからな。使えるものは全て使っただよ。」

おかげで研究費をぶんどってくるのに苦労したもんだぜ、といいながらベルディナは手綱を片手に葉巻に火をつけた。

「それ、まだ足りる？」

彼が吹かす葉巻を見ながら、ユアは心配そうに彼の瞳をのぞき込んだ。

「ん？ そうだな、後4本ほどだな。」

ベルディナは懐を探ると、バニラの香りがする葉巻を取り出して数を調べた。少し前まで20本ほど遇ったそれは随分と数が少なくなっているようだ。

「そろそろ新しいのがいるね。」

「そうだな。暇をみて調合しておいてくれ。一日や二日程度は無くても大丈夫だからな。」

ベルディナはそういって、葉巻をくわえ込み手綱で馬の調子を探る。

ベルディナがしょっちゅう吹かしている葉巻は、普通の者が吸う一般的な煙草とは大きく意味合いが異なる。彼の葉巻は、一般的なものとは違い、専門の薬師が調合する薬なのだ。

彼は、生まれた時より莫大な魔力を身に宿していた。それは、魔法種族と称されるエルフ族の中でも飛び抜けて高く、同時にそれは彼のみではなく、その周りにいる者にも悪影響を及ぼすほどのものだった。故に彼は幼少の頃から他のエルフ達から隔離された生活を送っていた。

そんな彼が人間の世界で生きていくためには、どうしてもその魔力を押さえ込まなければならぬ。彼の身につける輝石はそんな魔力を抑制し封印するためのものであり、それでも押さえきれない魔力を薬によって抑制するという生活を長く送り続けている。

彼が人目をはばからず、いつも煙草を吹かしているにもかかわらず仲間の誰もがそれを咎めようとしない理由はここにある。

ユアはそんな彼を見て少し胸が痛くなる。

「そんな顔するな。お前が調合したこの葉巻のおかげで、昔に比べると随分楽に生活できるようになったんだからな。」

ベルディナは、うつむいてしまったユアの髪をクシヤツとなでつけるると、少年のような、どこかいたずらっぽい笑顔を浮かべた。

「でも、根本的な解決にはなっていないよ！その薬だって吸い続けるといつか身体をこわしてしまうものだし、依存性もあるんだよ！それに、効果が切れた時にはすごく苦しくなる……。本当は、そんなもの作っちゃいけないんだよ。。。」

ベルディナの手をふりほどき、ユアは激昂した。その声は馬車の中にまで届き、心配したミリオンが「どうかしたのか。」ときいてくる声にベルディナは、「何でもねえよ。」と答えた。

落ち込み、手のひらで目を覆い尽くしてしまったユアの背中をなでながら、ベルディナは落ち着いた口調で話し始めた。

「俺はお前に感謝している。お前は俺にことごとく安らぎと新鮮さを与えてくれたんだからな。お前がいなかったら、俺は灰色の人生から逃れられなかったろうな……。まったく、俺にこんなこといわせんじゃねえよ、こっぴどくかしい。」

最後の一言が無ければこの上ない殺し文句となっていたら、ユアはそんな彼の不器用さに少しほほえみを浮かべると、彼に気づかれないようまぶたを拭くと、穏やかな笑みで彼にありがとうと伝えた。

「救い出してくれたのはベルの方だよ。ベルが私を拾ってくれなかったら、私は今は生きていられなかった。多分、そうなんだと思う。」

「ベルディナは何も答えなかった。そして、ユアは彼の表情が次第に険しいもの変わっていくことに気がついた。」

「ベル？」

どうしたの、ときく前にベルディナは前を指さす。

「あれは・・・何？」

それは、地上から黒煙だった。

「クローナ村の方角だ。」

森火事かもしれない。誰かがたき火をして、その不始末から出た煙かも知れない。いや、それにしても規模が妙に小さい。

そして、次第に漂ってくるこの独特の臭気。これは、肉の焼ける匂いだ。

ベルディナは戦場に漂う独特に死気を感じ取ると、手綱をふるって馬をせかせた。

馬車は急激に加速し、ユアは小さく悲鳴を上げると何とか取っ手に捕まり揺さぶられる身体を押さえつける。

「何があった？」

時折荷物が揺れる音が響く馬車の中からミリオンの大声が届いた。

「分からん。とにかく、戦闘準備をしておけ。」

ベルディナは、立て続けに手綱を振るい更に速度を上げていく。

「!?!?分かった、ユアは中へ。レミーから離れるな。」

ミリオンはそういうと、ユアを支え丁寧に馬車の中へと導いた。

「ミリオン……。」

不安そうなユアの視線に、ミリオンは「大丈夫だ。」と強く答え
ると、自らの剣を携えてベルディナの隣に腰を下ろした。

「青天の霹靂か。無事を祈るばかりだ。」

叢雲のごとく大地よりわき上がる黒煙を見たミリオンは、激しく
なる鼓動を何とか押さえつけながら身を固くしていった。

馬車の隅では急激に変わる状況に震えるユアをなだめながら、レ
ミュートもやがて訪れる恐慌を予感し、身体を固くしふるえを押さ
え込んだ。

火蓋は落とされた。後は駆け抜けるのみ。

失踪していく馬車の振動は、揺れ動く彼らの行く末を象徴してい
るかのようにだった。

(10) 平穏な道中(後書き)

ようやく前置きが終わり本格的に彼らの旅を始めることが出来ました。(ながかった・・)

次回からしばらくは戦闘がメインです。なれないシーンなので気合を入れさせていただきます。

どうぞおつきあいください。

タイトルを少々変更しました。今まで”第一話”としていたものを”第一部”に、第二話としていたものを第二部としました。

以降はこの第二部に全てアップしていく予定です。よろしく願います。

第二話 信仰の村クローナ (0) 信仰の村クローナ(前書き)

第二部第二話の始まりです。

ここからこの物語の主題に入っていきます。

現在修正第二稿目(2008/10/27)

第二話 信仰の村クローナ (0) 信仰の村クローナ

信仰の村クローナ。この村を語るためには、魔法ギルドの存在を欠くわけにはいかない。

魔法ギルド、この名を知らぬものはこの世界にはいないだろう。クリーフオ

遙か昔、魔術が全盛を誇っていた頃、魔法ギルドは魔法都市の名において世界を統治していたと言われている。その組織は、人が生きる上で欠くことの出来ない魔術の歴史と秘蹟を守り受け継ぎ、管理してきたと言われる。永遠を約束されたと思われた魔法都市は、かつての英雄、黄昏の魔法戦士と冥竜王の間クリス・ロジャースに引き起こされた大戦争において衰退の運命をたどることとなった。彼の英雄は唯一無二のイサー聖剣をもって、彼の闇の権化を討ち滅ぼすことに成功したが、その代償としてこの世界から魔術が消失することとなった。魔術の消失は、そのまま魔法都市の崩壊を意味した。

それより千年、精霊使いアルファ・デйна・スレイアが精霊をもって世界に魔術を復活させ、竜騎士クレア・ラインズ・フォントによって復活した冥竜王が滅ぼされるまで待つ必要があった。クレア・ラインズ・フォントの命をとした活躍の後、世界に訪れた安息と同時に二人の魔術師によって魔法ギルドは再建される。その再建の祖と呼ばれる二人の魔術師の名は、今更記す必要もないであろう。彼の大師父ルーヴァン・ヘウンリークと現在も生きる伝説と称される彼の大導師ベルデйна・アーク・ブルーネスである。

そうして、魔法ギルドは多くの偉人達の活躍によって今日にあり、あらゆる国の影響を受けることなく一国として独立をはたし現在にある。

そして、変則的ではあるが一国として独立をはたしている以上、隣接する他国とは領土の問題が常につきまとうようになった。特に、魔法ギルドにとって最友好国である神聖スリンピア王国とはもっとも多くの問題を共有することとなった。

元はスリンピア王国領であつたかつての魔法都市が独立したために、その境界線をどうするかということであるが、双国はその当時魔法ギルドとスリンピア王国を繋ぐ街道の中間にあつたクローナ村を両国とも領土の主権を主張し合わない緩衝地域と定めた。

故に、信仰の村クローナはどちらの国も所属せず、どちらの国からも保護を受ける、奇妙な村となつてしまつたのである。

また、信仰の村という言葉が示すように、元々この村は神竜を崇拜するサイリス教の巡礼者によつて作られた村であり、その長を代々村の中心に立てられた教会の神父が務めるといふ一風変わった習慣も存在する。

ともあれ、一度この村に訪れたものはこの村に住む人々がいかに敬虔なサイリス教徒であるかを知り、自身の信仰に対して大きな影響を受けさせられるであらう。

(魔法ギルド出版『現代論』、コラムの一部抜粋、著者アルバート・レティーザ・ホーキング指導師)

(1) 惨劇(前書き)

若干、グロテスクで生々しい表現を含みます。ご注意ください。

現在修正第二稿目(2008/10/27)

(1) 惨劇

煙じみた空気はむせかえるほどの熱気と臭気をさらしていた。

「ひどい……。」

いったい何が起こればこれ程の惨劇を生み出すことができるのか。

「大丈夫か。レミー。」

不用意にも深く息をついてしまい、むせ返るレミュートの背をさすりながらベルディナは腰の小剣を引き抜いた。

パチパチと木が炎をまとい爆ぜるノイズと共に、明らかに現実的でない獣のうなり声が地を響かせ渡り歩く。それが奏でる重鈍な響きは、まだ幾らかがそこにいて次なる犠牲者を捜し求めていることを知らせた。

「……ベル……。私は奴らを屠る……。」

熱に耐えきれず、ガラガラと崩れ去る家屋の音を耳に、ミリオンはゆっくりと剣を引き抜くと怒りをその背にまといながら足早にかげだそうとした。

「待て、ミリオン。」

現状が把握できていない状態で不用意に動くわけにはいかない。そんな言葉で彼を止めることは出来ないと分かっているながらもベルディナはその背に声を浴びせる。

「止めるか？」

彼の歩みを止めることは出来ても、身から猛る怒気を沈めることは出来ない。しかし、ミリオンは冷静だった。

「いや、止めねえ。とにかく、お前は連中の本隊を消せ。俺は、逃げ遅れた村人の搜索だ。」

「ユア。お前は避難している者を探し傷の手当てを。レミーはユアの護衛だ。いけるな？」

ベルディナは、口をつぐんだまま青ざめるユアとレミュートに目を向けると一気にまくし立てた。ユアとレミュートはそれに無言で答える。

「行動開始だ。」

そして、ベルディナは馬の側で立ちすくむ馭者に向かって声を張り上げた。

「あんたは女子供を連れて森に逃げる。奴らは鈍足だから馬で駆け抜ければどうということはない。一度村を一周してそれらを回収。こっちが何とか落ち着いたら信号を撃つ。空が見えるところで待機していてくれ。」

馭者は荷物運びである以前にギルドの魔術士だ。だから自分の身は自分で守れるだろうと彼は期待すると馭者の答えを聞かずミリオンの後を追った。

信仰の村クローナ。穏やかであるはずの村に突然襲いかかった悲劇。昨今話題に上る辺境での惨劇がこの舞台を作り出すまで、村人はとても穏やかに過ごせていた。

「畜生め！何で俺たちの村を……。何でこんな目に遭わなきゃなんねえんだ！！」

無惨にも折れ曲がりちぎれ飛んだ剣と共に膝を折る男の叫びは、彼の命を奪うモノにとっては何の意味もなさない。

しかし、彼はそこから立ち去ることは出来なかった。

「パパ・・・怖いよお・・・」

未だ幼く、母親の命と引き替えとしたこの命だけはなんとしても。しかし、彼らの死はその数歩先にそびえ、意思の宿らぬ灼眼を携え、高く掲げたその腕を今こそふるい落とそうとする。

その先にあるものは・・・。

男は眼を硬く閉じ、側でふるえる小さな命をせめてその猛威から守るがごとく、きつく抱きしめた。

「させぬ！！」

その声は幻か、熱を持つ大気のふるえが生み出した空声か。振り下ろされ、大地を切り裂き、荒れ狂う嵐となって襲いかかる熱気に覚悟を決めかねるその身は震え込み、今、己が何処にあることか理解できないままに幼子を大地に包み込んだ。

その絶叫をあげるは何者か。我が、他か。しかし、自らの血流が鼓動を打つ音を聞き、驚きのままに面をあげた。

「今仲間がこちらに向かっています。どうか、安全な場所へ。」

彼が見たものは、悠然と剣を携え、腕をもがれ闇へと霧散する獣をただ怒りの感情のままに見下ろす男の背であった。

「あ、あ・・・」

言葉が出ない。自分が助かったことが信じられない。せめてその顔を見せて欲しい。しかし、彼は振り向かず、嵐となる熱気のただ中へまっしぐらに突き進んだ。

その剣の放つ銀光は、闇の中に投げ込まれた一握の希望か。

男は立ち上がり、気を失った娘をしっかりと抱き留め、折れた剣を携え、彼の背を追った。

(背中を預けられる仲間がいないことがこんなにも心許ないと感じるようになるとは、俺も平穩に慣れきっていたということか。)

折れた剣を携えた男から預かった少女を抱え、ベルディナは自嘲するかのようには薄い笑みを浮かべた。少女はよく眠っている。

肝が据わっているのか、ただ単に状況が分かっていないだけか、その寝顔は全く穏やかなもので、何かを求めるようにその柔らかな頬をベルディナにすり寄せてくる。

その甘えた寝顔に幼い頃のユアのほほえみが重なり、ベルディナは僅かに心に平静を取り戻した。

それにしても・・・と、ベルディナは、先ほどの光景を思い出した。

遠目から見たミリオンの剣技は凄まじく、巨木のごとくそびえ立

つ獸を一刀のもとに両断するほどの鋭さだった。彼が一流の剣士であることは彼もよく知っていた。しかし、ただの一流の剣士がそのような方法で魔物を滅ぼすことが出来るものか。

怒りに身を任せながらも彼は驚くほど冷静に思えた。まるで、戦うことを宿命づけられた戦人のごとく、荒れ狂う感情を全て力に置き換えることが出来るのかと思えるほどに。

だが、あれはまずい。下手をすれば……。

しかし、その思考は再び出現した魔物の姿によって中断される。

村中を疾走する馬車は、なるほど多くの者達をその中へと誘うことが出来たようだ。しかし、それによって重みを増した荷重に、その車軸はきしみをあげて進行を妨げる。

「くそ！」

ベルディナは、馬車の行く足を引き留める邪悪な垣根をにらみつけ意識をとぎすます。

「数は6。一体当たり3発・・・いや、念のため5発だ。」

勢いを殺せぬ馬車はこのままではまともにもその垣根にぶつかり、そこで多くの命が散り去るだろう。ベルディナは、両手で抱えていた少女を小脇にやると、右腕を掲げ30の光の矢が飛翔し敵を打ち砕き消し去るイメージを送り込んだ。

そのイメージは身体を中心より湧き上がる魔力の奔流として急速に血流と共に身体中を駆けめぐり、活性化を遂げていく。

それを伝える神経の裏側にある呪術神経のパルスが脈を打つ血流のごとく逆流を始め、身の毛がよだつほどの不快感に脳が悲鳴を上げ始めた。

薬と輝石によつて魔力を押さえ込まれた身体で多くの魔力を行使することに伴う弊害は、彼の精神に多くの負担を強いる。

だが、今はそんなことを嘆いている暇はない。

「アーク・ブリッド クラスタ 光弾の射手・30連同時放射・・・」

その言葉を起点として、彼の腕の表面に表出した光の衣は、水中より発生した気泡が水面へと浮かび上がるように、空中へと光の小泡を生みだし、その数を増していった。

その様はまるで夜空に浮かぶ星団のごとく、夕暮れの陽光の下に切り取られた地上の銀河だった。

「シュー
いけ！」

そして、放出された地上の星団は馬車の背後より圧倒的な速度をもつて飛翔し、その眼前に立ちふさがる魔物に襲いかかる。幾重にも連なる魔弾はまるで己の意思を持つかのごとく軌道を変え、それが逃げる暇も道も与えぬよう襲いかかり、ことごとく命中、粉碎していく。

アーク・ブリッド。魔術士が習うもつとも基本的な攻撃呪文でありながらそれに込められた魔力がが大きいければ必殺たり得る。

光の明滅の後には霧散する黒い霧が 대기へとけ込むばかりで後は何も残らない。それに驚き歩みを止めた馬車を幸いに、彼はそれにかげより、腕の中に抱きかかえていた少女を彼に預けようとした。

「・・・??？」

目を覚ましてしまった少女は、愛らしいあくびをつききよろきよ

ると周りを見回した。そして、自分を抱きかかえているベルディナを不思議そうに見上げると、ただ一言、「パパは？」と聞く。

不安そうなその瞳を安心させるようにベルディナはニコツと笑いかけると髪をなでつけ、

「大丈夫だ。また後であえる。」

少女は、その笑顔に元気づけられ、太陽のようなほほえみを浮かべると、「うん。」とうなずき、馬車に乗り込んだ。

「大導師。これ以上は限界です。森に逃げます。」

興奮する馬をなだめ尽かせ、手綱を鞭のように操る馭者は、どうやら人に乗せるためにその積み荷の殆どを破棄したようだ。

「分かった。なるべく水場に近いところにいけ。魔物は水を嫌う。だが、空が見えるところだ。信号を送る。」

ベルディナはそんな彼に感謝すると、蒸留酒の小瓶を投げてよこした。度数の強い酒は、気付けと消毒に使える。安酒もこうして使われれば本望だろうと彼は思うと、彼らの無事を祈った。

村の出口まで馬車を護衛し、それに立ちふさがる魔物に光の矢を降らせ。彼は馬車を見送った。太陽は西の山の頂をかすめ、大地を血の赤に染め上げる。

馬車から手を振りながら遠ざかる少女に手を振り返しながら、ベルディナは街を振り返り返った。

（これを終わりにしてたまるか。）

彼は、逃げた馬車を追って迫り来る魔物達の一団を睨み付けると、風の魔力を纏いながら、それに身を躍らせた。

鋭い光の明滅が幾重にも重なり、魔力が爆ぜる振動が大地に響きわたっていった。

(2) 決意、そして戦場へ(前書き)

現在修正第二稿目(2008/10/27)

・本文の加筆修正及びサブタイトル『レミュートの戦い』から『決意、そして戦場へ』と変更

(2) 決意、そして戦場へ

咽元を込み上がる違和感に何度も嘔吐を繰り返した。

「大丈夫？レミー？」

ユアは教会を駆けめぐりながら、隅でうずくまるレミュートを気遣うが彼女は気丈に剣を掲げ、体内で魔力を練り上げた。

情けない。ユアは私が守るなんて言っておきながら、気を遣われているのは自分になるとは。自分が酷く情けなくおもう。

避難所となっていた教会は負傷者であふれかえっていた。崩れ落ちる焼けた柱に足を取られ大やけどを負ったもの。魔物との剣戟で片腕を亡くしたもの。血止めに縛った腕の先が腐り落ちかけているもの。それらがこの狭い空間に密封され、この世の地獄とも思える死臭が漂う。

手足に鋸を入れることに響き渡る絶叫は、地獄の竈にくべられた咎人のようだ。壊れきった身体は魔術では修復できない。ユアは、治療魔法の連続使用に遠くなりかける意識を気付け薬スリッソの力まで借りて鼓舞すると、教会のベッドのシートから新たな包帯を作り出し、流れる鮮血を縛り止めた。

「ドクター！こちらをお願いします。心臓が止まりかけている。」

ここに来てドクターと呼ばれるようになったユアは、無くなった腕の付け根に治療の魔法をかけるとすぐにその声の元に駆け寄った。

「マツサージを。教えます。」

「ダメ！人工呼吸は気道を確保してから。息を入れすぎると肺が破裂します。」

おそらくこの教会の神父もそれまで多くの人の命を救ってきたのだろう、しかし、これは酷すぎる。

レミュートが目を背けたその時、バーンという何かが爆発したかのような衝撃が教会全体に響き渡った。

恐慌が人々を襲い、シヨックで気を失ったものが周りをさらなる混乱へと陥れる。

「先ほどこの教会には結界を貼っておきました！！そう簡単には破れません！！皆さん、落ち着いてください！！」

ユアが声を張り上げる。

「みんな！ドクターが大丈夫だといっているんだ。とにかく落ち着こう。大丈夫、我々は助かる！」

神父も声を張り上げる。しかし、その衝撃は止まるどころか徐々にその威力を増していく。

レミュートはユアを見た。そして、偶然かユアもレミュートを見ていた。その視線同士が絡み合い、レミュートは覚悟を決めた。

「私が・・・やらなくちゃ・・・。」

そのつぶやきは恐怖を打ち消すには足りない。しかし、周りの者達のすぐるような視線は彼女の戦意を僅かながら高めた。

そして、レミュートは剣を取り、鞘から引き抜き、門を開いた。

無知であつた王女は自らの意思で剣を取り、孤立無援の孤独な戦場へと踏み出した。

彼女は、ようやくその一步を踏み出すことが出来た・・・。

まるで、審判の門を開くごとく重苦しい響きをもつて扉は開かれた。その先には山の輪郭を埋め尽くす赤。そして、それに身を染める巨木のごとくそびえ立つ獣。

それは、まるで目に見えない壁に阻まれるようにその場に立ち止まり、けして侵入できないことに憤るようにその腕で虚空をたたきつける。

レミュートは静かに扉を閉じ、静かにそれを見つめた。

眼前にそびえる獣は、果たして彼女を認知しているのか。それは、なぜそこまでしてここにいる人たちを殺そうとするのか。意識を持たず、まともな命すらも持たされずにこの世に顕現した彼らは、なぜ命あるもの、意識を持つものを憎むのか。いや、憎しみを持っているのかどうかすら分からない。

言えることはただ一つ、そこにあるのは純粹な敵意のみ。

レミュートは剣をおろし、深く息を吸い込みそしてはき出した。

『それは、世界が生み出したよどみ。意識ある者達が目を背け、破棄していったものの吐き溜まり。故にそれらは汝等を羨み、憎み、そして殺す。それは避け得ぬことである。』

遠くから埃まみれの風に乗って剣を打ち合う響きと魔力がはぜる音が届く。

（大丈夫、あの二人は強い。きつと何事もなかったかのように勝利

をつかんで帰ってくる)

レミュートは目を閉じ、剣を握りしめた。手に入れて間もないその剣は未だ彼女の手には馴染んでいない。しかし、その硬質で氷冷な金属の感触はとても心強く彼女の戦意を後押しする。

『ならば人の子よ。汝等が出来るはそれをただ滅ぼすのみ。自ら生み出しし淀みは自らの手によって封ぜよ。我らはその手を助く。』

レミュートは目蓋を開き、剣を持たない手で練り上げた魔力を解放する。

それは、3条の光の矢となり魔物に襲いかかった。

『お前が剣術だけでミリオンに勝つことはおそらく一生かかっても不可能だろう、かといって魔術だけでは俺に勝つことは何百回生まれ変わったとしても絶対に不可能だ。ならばどうするべきか考えてみな。』

ベルディナに言われたその言葉に対する答えが、この戦いで出されるかどうか。レミュートはそれを心して両の手で剣を握りしめた。

3条の光の矢に当てられた魔物は初めて眼前にたたずむ敵を認識した。

ベルディナであれば、おそらく今の攻撃で決着はついていただろうが、今の彼女の攻撃は彼ほどの必殺にはなり得ない。

レミュートは結界の外へと躍り出た。今、自分がすべきことは敵を倒すことではなく、ここを守り通すこと。

たとえ、何事も必殺になり得なくともその動きを止めることは出来る。

アーク・ブリッドによって逸れた敵の意識をもって、彼女は死角であるその足をめがけて剣を振るった。
キーンという音と共に、剣はまるで鉄に打ち付けられたかのようにはじき返された。

(・・・やっぱりダメね・・・)

レミュートは舌打ちをしながら、その彼女を振り払う腕を避けながら一足飛びで敵から距離を取った。

レミュートの腕力とその剣では敵の攻撃を受けきることは出来ない。受け流すだけの技術が無ければ、後はよけることしかできない。そして、距離を離し魔術をたたき込め。それが出来ないなら出来る状況に持ち込め。ベルディナとミリオンによって耳も身体も痛くなるまでたたき込まれたセオリーを彼女は忠実に守った。

今の一撃で刃毀れを起こしたかもしれない、とレミュートは軽く剣のブレードを確認するが目立った損傷は確認できなかった。

魔物は予期せぬ相手にいきり立ったのか、その凶体からは想像が出来ないほどの俊敏さで突撃をかける。それが踏み込み大地を揺らす振動はまるで小規模な地震のように足場を不安なものとする。

もつれかかる足踏みを強引に整えると、彼女はその射線から逃れるべく身体をひねる。魔物が振り下ろした腕はさつきまで彼女が立っていた地面をえぐり込み、砂煙と小石を周囲にまき散らした。

(いけない！)

巻き上げられた砂煙はレミュートの視界を遮断する。着地する場所にまで気が回せなかった彼女は、そこにあつた石に足を取られ転倒しそうになるが、彼女の意識はそれを度外視した。

今、体勢を整えようとして無理な動きをすればそれは圧倒的な隙

を相手に与えてしまう。彼女の意識は剣を持たない左の指先に集中し、砂煙が覆い隠す魔物の位置を何とか探りあげた。

何条も用意することは出来ない、今作り上げることが出来る最高威力のアーク・ブリッドを相手にたたき込む。彼女の指先の光は、突如視界から消えた獲物を探し求め行動を止めた魔物の身体を正確に捉え着弾する。

倒れ込む身体、打ち付けた背中から突き刺さる衝撃にレミュートは息を詰まらせる。着弾を確認することは出来なかったが、もしあれが胴体に当たっていさえすれば、何とか致命傷にはなったはずだ。転倒した時に手からすり抜けた剣を何とかたぐり寄せ、それを杖代わりにして立ち上がった彼女の双眸は、砂煙の向こう側にたたずむそれを見て驚愕の色に染まった。

着弾は確認できた、おそらくまっとうな意識を持つ存在ならそれを持って終わりとする事が出来ただろう。しかしそれは、片腕を肩口からもぎ取られたにもかかわらず、再び見つけた獲物を蹂躪することしか頭に無いのか。

レミュートは剣を掲げ、身体を固くする。次の衝撃で自分はいったいどうなるのか、想像もしたくない未来を思い描きながら。

それは一瞬だった。まるで破城鎚で殴られたかのような衝撃に痛みを感じる暇もなく、身体は宙に投げ出され、その先にあった何かの背中を打ち付け地面に放り出された。

「あ・・・ぐあ・・・かふ・・・」

痛みは感じなかった、襲いかかる衝撃が大きすぎたのか、頭がどうにかなくなってしまったのか。感じたのは苦痛だけだった。まるで身体の中で爆発が起こってしまったのか、自分の中から響き渡るミシリという不快な感触が骨を通り抜けた。

口を切ったのか、それとも臓物に傷が入ったのか、口から吐き出されるものには錆びた鉄の味がこびりついていていた。

視界が黒く染まりつつも、まだ意識は健在だったらしく、背中に当たる草の寝具のような感触は打ち込まれたのが納屋だったことを知らせた。

不幸中の幸いかと思いつつ、彼女は手足を動かそうとした。若干のしびれと痛みを伴いながらも四肢は何とか健在だったことに、僅かな安堵をつくくと、悲鳴を上げる身体を黙らせながら何とか起き上がる。

幸い吹き飛ばされたにもかかわらずその剣はまだ手の内にあった。敵の攻撃の殆どを受けた止めたはずのその剣は、驚くことに僅かな刃毀れ以外に目立った損傷は見えない。

ミリオンの目利きに感謝を覚えつつ、買って早々に刃毀れをさせてしまったことに申し訳なさを感じながら、彼女は打つ手を探った。相手は硬い。自分の剣術では足を止めることは出来ない。かといって、魔術でも有効な効き目はない。

それでも足止めさえしておけば、そのうちミリオンかベルディナが加勢に来てくれることを期待していた。しかし、どうやらそれは甘かったらしい。レミュートは耳を澄ませた。激しい剣戟と魔力が爆ぜる音は、彼女がここに降り立った時と同じ響きを奏でている。

さっきまで納屋の外で息づいていたそれは、沈黙した自分に興味を失ったのか、徐々にその足音は遠ざかっている。このまま放置すれば再び教会が危険にさらされる。教会に張られた結界はそう長くは持たないと彼女は感じていた。

いくしかない。だけど、どうすれば。孤立無援である以上、自分
があれを屠る以外に残された方法はない。しかし、その方法とは・
。

レミュートは再びベルディナの言葉を思い出した。

「お前が剣術だけでミリオンに勝つことはおそらく一生かかっても不可能だろう、かといって魔術だけでは俺に勝つことは何百回生まれ変わったとしても絶対に不可能だ。ならばどうするべきか考えてみな。」

おそらく、彼はその答えを知っている。そして、彼の言葉からたどり着いたことは剣術と魔術を織り交ぜて戦うこと。それは、何とかなった。だけど、それだけでは足りない。

その答えは……。

レミュートは、納屋を出て再び死地に降り立った。背後から差し込む紅の陽光は、片腕を亡くしつつも力強い足取りで歩みを進める魔物を鮮やかに映し出した。

そして、それは歩みを止め背後を振り向いた。瞳の宿らない紅の双眸ににらみつけられたレミュートは何故か恐怖を忘れていた。既に感情さえも麻痺してしまったのか。再び矛先を自分へと向けるそれを前にして、レミュートは驚くほど冷静な自分に違和感を感じながらも、その重鈍な歩調に遇わせるようにゆっくりと剣を構えた。

レミュートは動かない、地響きをあげて迫るそれを見つめながら、ただ呼吸をそれに合わせ待ち続けた。既に足を動かす余力もない。脇の骨をはいずり回る鋭い痛みは、おそらく肋骨の幾つかが折れてしまっているのだろう。だが、その痛みはむしろ彼女の意識を今という現実に着させる助けとなっていた。

彼女はそれでもまた考え続けていた。おそらく次が最後の一撃となる。ならば、その一撃はどうすればいいのか。剣戟か、魔術か。両方に必殺になり得ないそれらをたたき込んだところでその先は変わることはない。

ならば、もしそれらを同時に（・・・）たたき込むことが出来れば・・・。

剣術と魔術を織り交ぜるのではなく、その二つを等価なものとして同時に放つことが出来れば・・・もしかすれば、勝機があるかもしれない。

レミュートは自然とまぶたを閉じた。そして、頭の中に一握の光を思い浮かべる。魔術の全てはこの明確なイメージによって始まる。そして、その光は一条の刃となって緩やかな回転を始めた。

敵の歩みを感じられる。後5歩。レミュートは、集中を続けた。緩やかな回転はやがて光の刃を円錐状へと変化させ、輝きが最高潮に達する。そして、次のプロセス。それまではその光を指先に集中させていたが、今は違う。その指先の更に先にあるもの、剣の切っ先からのぎにかけて、その光が剣を包み込み輝く様子を思い浮かべる。

風の流れを感じた。敵は既に立ち止まり、瞳を閉じ静止した獲物を捕らえその爪を振るおうとしている。レミュートはその動きに合わせて、剣を振りかざす。不思議と、それまで感じていた剣の重みはなりを潜め、まるで自分自身の腕だけを振るっている感覚に襲われた。

敵の腕が止まった。

レミュートは閉じたまぶたを引きはがすと、振りかぶった体勢のまま後ろ足を蹴り上げ、先ほどまで脳裏に描いていた情景と寸分の違いもない敵の胴体めがけて剣を振り下ろした。

そして、彼女は初めてそれを目にした。一瞬にして輝かんばかり

の光を放つ自らの剣の軌跡を。

それは、何の抵抗もなくスルリと振り下ろされた。

自分は何を切り裂いたのか。まるで空気のみを切ってしまった感触に恐れを抱きつつも、彼女の意識は白く沈んでいった。

(2) 決意、そして戦場へ(後書き)

・・・戦闘シーンは苦手です・・・。

もっと練習したいと思います。

もっとこうした方が良いというご意見をお持ちの方は是非ともお書きください。評価、感想をお待ちしております。

(3) 深夜の語らい(前書き)

内容を変更しました。(2008/10/25)

サブタイトル『夜の語らい』から『深夜の語らい』へ変更(2008/10/27)

(3) 深夜の語り

「まだ起きていたのか。」

蝶番のきしむ音と共に、光の漏れる教会の小部屋に顔を出したミリオンは、そこでただ一人紙にペンを入れているベルディナの姿を見つけた。

「まあな。だが、そろそろ一段落だ。」

文字を追う時だけにつけるメガネを外しながら、ベルディナはそういうと珈琲の入ったカップを取り上げそれを飲み下した。

「「こちらもようやくといったところだ。」

ミリオンはそういうとベルディナの対面の席に腰を下ろし、ヤレヤレと肩の力を抜いた。

「ところで、被害報告はどのような感じだ？」

ミリオンは、側にあつた書類の束をつまむと軽くそれに目を通し始めた。

魔物を撃退してからもミリオン、ベルディナ、ユアには休む暇は与えられなかった。

ミリオンは、焼け落ちた家の消火や瓦礫の撤去、負傷者の運搬等の陣頭を自ら買って出て、ベルディナは村が被った被害をまとめる作業を行い、ユアは引き続き負傷者の治療に専念した。

日が沈み、かがり火をたいて作業を続けたが自分と周りの村人の疲労も限界を超えてしまったため作業を中断して全員に休むように

通達した。まだまだやることは多い、しかし今誰かが倒れてしまつては本末転倒だと周りの男達を説得することに随分と気力を遣つてしまった。

ベルディナは、ミリオンに今仕上げた書類を放り渡すと力なく椅子に背中を預けた。

「ひでえもんだ。こんな状況、飲まずにいられるか！」

ミリオンはその書類に目を落とした。死者10名、重軽傷者72名、行方不明者14名、村の被った推定被害総額42万700ソート。医療品、食料、毛布、燃料の不足。最後にかかっている魔法ギルドとスリンピア王国の対策の不備と対応の遅れに関する批判の文が載せられている、これは彼の愚痴なのだろう。王都とギルドに対して送る書簡に書く文章としては少し棘が在りすぎるようにも思えたが、ミリオンはそれを口にはしなかった。正直なところ、彼の思いも同じだった。

「それにしても。」

と、書類をまとめてベルディナに返したミリオンは、その言葉でベルディナの注意を引いた。

「うん？」

ベルディナは、書類丸めてを小振りな筒に収めながら彼を上目遣いに見た。

「少し・・・いや、随分奇妙に思わなかったか？今回の事件に関して君の考えを聞きたい。」

ベルディナは、ふむと鼻を鳴らすし、

「考えねえ。さて、どこから話したもんか。」

と呟くと、立ち上がり書簡を伝書鳩にくくりつけ窓から放った。

小さな白い羽を羽ばたかせ、夜の星空のを軽快に飛び去っていくそれを、姿が見えなくなるまで見送ったベルディナは、そのまま夜空を見上げながら、懐から取り出した煙草に火をつけた。

夜の冷たい風に揺らぐ蠟燭の炎に映し出された彼の横顔には何の感情も宿っていないように見えたが、ミリオンには彼が今、怒りを胸に宿しているように思えた。

ベルディナは、そのまま暫く無言で夜の空を見上げた。星の瞬きは何の制約も受けず空に点々と瞬く。スリンピアで見上げた星空はどこか薄ボンヤリとしていて少し趣に欠けるものだったが、ここで見る星空は格別だ。

都会と比べて空気に埃が混じっていないのか、光が少ないためかこのような事件さえなければ酒を片手に星見を楽しんでいただろうとベルディナは残念に思う。

口元まで減った煙草を皿でもみ消すと、ベルディナは窓を閉じ、再び椅子へと腰を落ち着けた。

「お前のいうとおり今回の事件はあまりにも奇妙だ。いや、不自然と言った方が良いか。」

唐突に紡ぎ出されたその言葉に少し困惑しながらもミリオンはそれに耳を傾ける。

「何が一番不自然かというと、あれだけの魔物が徒党を組んで村を襲うってことだ。本来ならあり得ない。」

ミリオンは、なるほどとうなずいた。どうやら、自分が考えていたことと彼が考えていたことは同じだったようだ。

彼は、部屋の隅に置いてあった荷物からウイスキーの小瓶を取り出すと側の戸棚から小振りのグラスを二つ取り出し、片方をベルデイナに渡した。

ベルデイナはそれを受け取り、自分とミリオンのグラスにウイスキーを少し注いだ。この後もまだ仕事が残っているため深酒するわけにはいかない。

「私は、魔物というものは本来集団で行動することはないとはきいていた。それは何故なのだ？」

ミリオンは、ウイスキーでほんの少し口をしめらせるとそうベルデイナにきいた。安酒にありがちなきついアルコール臭と、バランスの悪いアロマが咽を焼くが、今の彼にはそれが逆に心地よく感じられた。

「魔物つてのはかなり特殊な状態にならないと自然発生しねえ。だからだよ。」

「ふむ・・・つまり、そのような特殊な状態が一度に何度も発生することは自然ではあり得ない、ということか。」

「そういうことだ。この一年ちょっとで出くわした魔物はどれも単体だったよな。」

「ああ。」

「あれが、本来自然なあり方だ。まあ、出くわす頻度が多すぎたってこと自体が異常なんだが・・・。ともかく、今回の事件、裏に何かあるはずだ。」

「ふむ、本来自然に発生し得ないことが発生してしまったということとは・・・何か作画的なものが裏に潜んでいる。君はそう考える訳か。」

「あくまで俺の勘だがな。おそらく間違いない。」

会話中全く減っていなかったウイスキーを、ベルディナは一気に飲み干すとその味の悪さに目を白黒させた。

「急に飲まない方が良い。咽どころか胃袋すらも焼けてしまうぞ。」
「そういうことは早く言いやがれ。」

ベルディナは急いで水をくむと一気に飲み干した。
こりゃ、明日は腹痛で目が覚めそうだな。と、机の上に鎮座するボトルを憎々しくにらみつけると、汲み直した水に少量それを注ぎ込んだ。

不味くても飲めるだけ感謝しなくてはな。とミリオンは細く微笑むと、扉を叩く音に耳を澄ませた。

「空いてるぜ。入りな。」

どうやら、ベルディナは来客があることを知っていたらしく、ノックの音をまともにきく前にその声をやった。

「・・・入る・・・ね・・・。」

ゆっくりと開かれた扉の向こうからは、表情に疲労を浮かべたユアが姿を見せた。彼女からは濃い酒の匂いが漂ってくるが、それは治療の際に使用した蒸留酒であることは容易に想像がついた。

「随分お疲れのようだな。ユア。」

ミリオンは立ち上がってユアの肩を支えると、空いている椅子に座らせた。

「うん・・・あり・・・がと・・・。ミリオン・・・。」

ユアは、そういうと彼の手を取り頬に寄せるとホッとため息をついた。

「まだ終わらんのか？」

彼は激務に乱れたユアの銀髪を解きほぐすように丁寧に丁寧になでつける。

「まだ・・・だけど、もう、寝る、ね・・・。」

ユアは既に夢の中にいるような様子でミリオンの手を握りしめた。おそらくもう、殆ど意識がなくなっているのだろう。

「ユアをベッドに運んでやれ。廊下の突き当たりの部屋なら使えるはずだ。」

その部屋は本来ベルディナのためにあてがわれていたものだったが、今のユアにはしっかりと疲れをいやせるベッドが必要と判断した彼はミリオンにそうつけた。

「分かった。」

ミリオンは彼の気遣いに心の中で感謝すると、既に夢の中に旅立ってしまったユアを抱き上げ、ゆっくりとした歩調で部屋を出る。

「ああそうだ、聞き忘れてたが。レミーの容態はどうだった？」

ベルディナは、あの戦闘の最後に教会の前で気を失って倒れていた彼女のことを思い出した。

何が起こったのかははっきりとは分からないが、彼女は何か大きな力で切り裂かれた地面に転がっていたことから彼女も魔物と戦って居たのだろうと彼は判断した。服の所々が裂けて、鮮血がにじみ出していた。強い衝撃であれば骨の数本が折れていたが命には別状はなかったため、簡単な応急処置とユアの治療を受け、今は民家の一室に寝かされているはずだ。

「よく眠っている。私に来る少し前までは昏睡状態だったが、呼吸も安定してきている。明後日には起きてくるだろう。」

「そうか、なら安心だな。引き留めて悪かった、お前ももう休め。出来れば、ユアの側についてやってくれ。」

「そうさせてもらおうよ。」

ミリオンは、腕の中ですやすやと眠るユアを優しい瞳で見つめながら扉を閉めた。

「二人つきりでいかがわしいことするんじゃないぞ。」

(ま、あのあいつに限ってそんなことはしねえだろうがな。)

あいつらの奥手ぶりには困ったもんだぜ。と独りごちながら、彼は酒瓶を机の隅に置くくと再びペンを取った。

その晩は、その部屋を訪れるものは誰もいなかった。

(4) 夢(前書き)

(2008/10/25) 変更前の(3)を(4)とさせていただきのです。

内容は以前の(3)と同じですのでよろしくお願ひします。。

サブタイトル『レミュートの夢』から『夢』に変更。(2008/10/27)

(4) 夢

私は夢を見ていた。たぶんこれは夢なのだと思った。そうじゃないと、納得できない。

空虚な空間だ。見渡す限り存在するのは何の仕切りも見あたらない白い空間。

広大に、ともすれば無限に続くとも思われるこの世界の中心にただ一人たたずむ私は、その風景に違わずとも空虚な瞳でそれらを見渡していた。

これが私の深層を映し出す鏡なのだとすれば、私の本性は空っぽだということなのだろうか。

目を閉じれば、その先には闇が広がるはずだった。しかし、まぶたをおろしたとしてもその視野が変貌することは無かった。気がつけば、私の身体は世界にとけ込みただ、私の意識のみがここに浮いているだけのように感じられた。

とても気持ちが悪い。だけど、何故か私はここが酷く居心地が良いもののようにも感じられた。不快だ。私はこんなものを望んでいるというのか。違う、私が望む私の世界はこんなものではない。

『ならば、^{そなた}其方は何を望む』

未来を。光に満ちた安息を。

『ならば、^{そなた}其方はそのために何者となる』

誇り高きものに。自らを誇りとできる存在に。

『ならば、其方そなたはそのために何をなしてきた』

私は、まだ何も成し遂げていない。だから、これからそれをなしていく。

『ならば、其方そなたはそのために何をなす』

それは……。分からない。そのために旅に出た。何かを成し遂げるため、その方法を探すため。

『ならば、其方そなたは何者か』

それは……。私はいったい何者なのだろうか？

『其方そなたは何をもって自らとする』

私が私として認識する私は、いったい何を根拠にこの世界に存在するのだろうか。

私は私であると知る理由は、私の周りの人間が私を私だと教えてくれるから。

『ならば、其方そなたを認識する者達は何をもって其方を其方たらしめる』

私が私だとする根拠が、私以外の人たちが私を認識していると感じ取れるだけに過ぎないのだとすれば、私が私であるという確たる根拠は何処にも存在しない。

もしも、私以外の人たちが認識する私というものが、私が認識する私とは異なるものであったとしたら、私が私である根拠は脆く崩れ去るのか。

『重ねて問おう。其方そなたは何者か』

私はどうして私として存在しているのか。一人称でしか認識できないこの世界が確かにここに存在している確証は何処にあるというのか。

私は、それが知りたい、私が私としてここに在る根拠、そして、私が私としてこの世界に存在する理由を。

『ならば、知るがよい。其方そなたが何者か。其方そなたが何をなさんとするか。我らそなたは其方を見守ろう。其方そなたの命の潰えるその時まで。覚えよ、我らは常に其方と共に在らんことを。心せよ、其方の行く末には暗雲の広がりたるを。願わくはその末に希望の在らんことを』

(5) 主達の語らい

スリンピア王国の王宮は世界に誇る大国の称号に違えることなくまさに絢爛豪華を絵に描いた様子だった。特にその玉座に施された彩色は国中の名ある彫刻家や建築家がこぞって寄せ集められ、十数年の歳月をかけて作られたものであるからその程を伺うことが出来る。

しかし、その王宮の外れにある隠居のような小部屋にはまるで庶民の一室をそのまま持つてきたかのような異質な場所があった。

「久しぶりだ、クロード。スリンピア国王。」

クロードは読んでいた書物から目を上げ、公務の合間に出来たつかの間の休息を訪ねてきた友を迎え入れた。庶民の一室ようなといっても、そこにあるのは埃臭い喧噪ではなく、王族がたしなむべき静謐さと不可侵性が保たれている。その住人であるスリンピア国王、クロード・ゼフィール・スリンピアも今は玉座に座る時とは違いゆったりとした部屋着を着込んで居るが、それが王族の気品を損なうことはない。

久しくこの部屋に入るグリユート、グラジオン国王は、部屋の持つ雰囲気とその家主の持つ雰囲気の間格差をいつも滑稽に感じている。ついつい口元がゆるむ彼を見て、クロードと呼ばれたスリンピア王国の国王は相好を崩し、久方ぶりの再会を祝った。

「久しぶりだ、グリユート。グラジオン国王。最近はどうもやるこ
とが多くなつてね。君と会うのも難しくなつてしまったな。」

グリユートは、「それは私もだ」と答えると、紅茶のセットが置かれていた狭い丸テーブルを挟んで彼の正面に設えられている木製

の椅子に腰を下ろした。

従者は連れていない。それはクロードがいやがるからであるのと、グリユート自身も友との会話に他者を挟みたくないからだ。

「それにしても、随分きな臭いことだ。君のこここのところの多忙の理由はこれか？」

グリユートは脇に挟んでいた今日の日付の入った新聞をテーブルに置くと、深く腰掛けため息をついた。その一面にでかかど飾られている記事にクロードは見飽きたと言わんばかりにため息をつき視線を外した。

「せっかくの休息に勘弁してくれ。今だけは忘りたい。」

彼のその瞳を見て、グリユートは無粋なことをしたと詫びるが、ただの雑談が目的ならわざわざここに来る必要もないと改め茶棚からカップを取り出すとクロードが入れた紅茶をそれになみなみと注いだ。

クロードは自分のことを他人にやらせることが何よりも嫌いだ。だから、この部屋は従者はおるか緊急の用事がない限り重鎮である大臣さえも立ち入りが禁じられている。しかし、彼の一番の友人であるグリユートだけが無許可での立ち入りが許されている。グリユートは少しばかりそれを誇らしく思うが、大国の国王たるものがあるような引きこもりをしては下の者達を混乱させるとも思っていた。

「お互い自由にはなれんものよな。」

カップを僅かに揺らしながら、その水面を移り変わる部屋の景色を眺め、グリユートは少しため息混じりに呟いた。

「そうだな、悪ガキだった俺たちが今では一国の主なんて話は笑えて涙が出てくる。」

両手を広げて肩をすくめるクロードの仕草は、自分の半生をいかにも滑稽だったかと物語る様子だったが、さすがにそれを真に受けて失笑するわけにはいかなかった。

「私も時々ベルディナに言われるよ。『人は成長するもんだな。』とな。」

「成長と言つよりは少しは演技が上手くなったというべきだろう。俺も君も根子の所はあのと時のままだ。そう思わないか？」

グリユートは「確かに」と笑いながら答えた。

今はなきグラジオン前国王が在冠の時、グリユートは良くも悪くも自由な武人だった。剣を扱わせれば王国一。それは如何なる王国騎士でも太刀打ちできない剛の者であることは世界中の王室の知るところにあつた。故に、彼にとって王国は狭すぎた。世界にはまだまだ自分よりも強い戦士が居るはずだ。

自らの力を律する強者は人の表に立つことはない。そして、実践をくり抜けた歴戦の勇士は人前より姿を消すことが美とされてきていた。自らを賞賛せず、誰からの賞賛も得ず。ただ黙々と自らの技をとぎすましそれを密かに後世に伝えていく古強者の存在。グリユートは16になった頃、彼らへの思いをこらえきれず半ば城出のごとく世界へと飛び込んでいった。当時彼の教育係であつたベルディナを携えて。

それを思うと苦笑いをするしか他がなかった。なるほど我が娘、レミユートはしっかりと自分の血を受け継いでいる。あれが男に生まれれば全てはうまくいっていただろう。我が跡目であるレイリアは国を支えるには少し気が弱い、あれはどちらかというとベルディナのように自分の決めた一つの道をただ黙々とやり遂げる生き方が

あつていと彼は感じていた。

しかし、国をまとめ上げるのはレイリアの仕事だとも彼は思う。自分の跡目を引き継ぐ以上、その行いは自分と同じであってはならない。

（私は力と威光で国をまとめ上げた、息子は知力と努力で国をまとめ上げるべきだ。）

「ところで、そちらの王女レミュートは元気にしているのか？俺の息子と娘が最近会いに来てくれないとふくれている。王子レイリアの方は時々顔を出してくれるのだが。近々何とかしてくれると助かる。」

やはり、とグリユートは込み上がる笑みをこらえた。この男もやはり私と同じ子を思うと国王より父親の顔になつてしまふのか。特に彼がこれまで経験してきた肉親達との関係を思えば、確かに彼が妃と子供達を大切に思う気持ちは理解できるが、それにしても少し過保護すぎる様子もあるとグリユートは感じた。

「それは、無理な注文だ。私の娘、レミュートは今国にはおらん。」
「ほう、ついに花嫁修行にでも出したか。惜しいことだ、あれは良い戦士になれたらうに。」

「いや、あの者は剣を修めることは出来ぬ。それはあやつも自覚しているだろう。」

「なるほど、だから諦めさせるために花嫁修業にと？それは酷なことをしたな。それにしても残念だ。うち（スリンピア）に預けてくれたのなら数年で最高の淑女に育て上げられたものを。」

「花嫁修業ではない。今はベルディナ達と共に旅に出ている。今どこにいるかはさっぱり見当も付かん。」

「へえ、旅にな。若い頃の君を思い出すな。そうか、なるほど君も豪気なものだ。良くそれを許したものだ。」

「いや、私と同じだ。」

「出ていったと言うことか。いやはや、あの王女は容姿は君の嫁と似ているが、その中身はまるつきり君と同じと言うことだ。」

「血は争えぬものだ、何度それを言われたことか。」

「むしろ心強いではないか。君の娘の帰還が楽しみだ。如何なる戦士として国に帰るか。いつそのこと王位継承権などあの娘にくれてやるといい。その方がよっぽど君の子供達のためになるだろう。」

「それは、言わぬ約束であろう。」

「悪かった。」

それをグリユートが許しても国の重鎮達はけっして許しはしないと彼は知っていた。大臣達の信頼を得られない国王の国には未来はない。しかし、国民はどう思うだろうかとグリユートはふと思った。何にしても自分が存命であるうちに跡目の決着はつけておかなければならない。さもなければ重鎮や貴族達の利権や派閥争いでレイリアとレミユートが対立する可能性もまた否定できないからだ。あの子達にはそのような人生を歩ませるわけにはいかない。

せめてもの救いはベルデイナが次期国王にはレイリアが相応しいと考えていることか。もしもの時は頼りにせざるを得ないだろうと彼は思い、何かと苦勞をかけてしまふ彼に申し訳ないと感じていた。そして、王家の跡目の困難さはクロードにとっても他人事ではなかった。クロードは彼の父とは違い、正妻の妃以外の室を持っていない。彼の父は多くの愛を持つ男だったと彼は常々ため息混じりに話す。それは彼なりの最大の譲歩であり婉曲なのだが、それを聞いたものの全ては彼の父、前スリンピア国王が女性関係に節操のない人物だったと推測できるだろう。

故に彼の崩御の後その継承には多くの問題が生じることとなった。

「父は確かに政治的に辣腕な男だったが、生来詰めの甘い男だったのだよ。まさか自分の死後になって自分の息子娘達がこのような醜

い争いを演じるなど、夢にも思わなかったのだらう。あの男が遺書なりなんなりで死後の後継者やその他の嫡系への配慮を記してくれていたなら、俺は弟や妹たちを失わずに済んだのかもしれない。全く馬鹿な男だった。』

言葉辛辣に語るクロードの瞳はいつも悲しみの色に染まる。父の死後、悲しみの病に伏せる母を看取りながら我こそはと争いを続ける異母兄弟達の争いとそれに群がる貴族や大臣、重鎮達に囲まれ彼はまさに孤立無援の青年時代を送っていた。

一度は逃げることを示唆されたこともあった。しかし、自分が逃げれば母はすぐに殺される。例えば病で先は長くないとはいえ母にそのような最後を与えるわけには行かない、そして権益や立場などかまわず彼を守るうとする騎士の者達も彼らの先に暗雲があつてはならないと説き伏せ、彼は自ら孤立への道を選んだ。

『俺はお前とお前の弟妹、そして妃達の全てを愛していた。そしてそれ以上に俺はこの国を愛していた。お前には苦勞をかけるかもしれんが、何とか守ってやって欲しい。愛していると行っておきながら父親らしいことは何一つ出来なかった、お前は私のようにはなるな。』

継承権を辞退することも考えていた。しかし、彼は父が今際に残したその言葉を思いそれだけは出来ない^{と心に誓い}、母の逝去を機に彼はこの動乱の終息を目指して密かに動き始めることとした。

その後数年。スリンピア王室の暗黒時代とも呼ばれるその動乱は結局相次ぐ暗殺や襲撃の末、争いあつて^{いた}弟妹たちは相次いでこの世から去り、その争いから最も遠い位置にあつたはずのクロードがスリンピア^{セフィール}国王の名を継ぐことで決着を見た。その間に何があり、クロードはいつた^いどのような行動をしていたのか。それを知るものは既にその本人だけとなり、彼はそれをけつして口にすることは

ない。

彼が他の候補者を闇討ちしそれを相打ちに見せかけたという噂がまことしやかに流されたこともあったが、グリユートはそれを即座に否定した。確かに、友であるクロードはともすれば策略に長け、非情な面を持ち合わせることは彼も知っていた。しかし、幼少から彼を知るグリユートには彼が異母兄弟達を確かに愛していたということも知っていた。そんな彼が、例え王室平定のためとはいえ愛する姉弟達をその手にかけることは絶対にないと信じている。

それにしても、とグリユートは今度は遠き空の下にある娘のことを思いやった。あれから一年と半年になるベルディナより三月に一度は書簡が届き、娘の安否を知らせてくれるのだが、彼は自分たちが今現在何処にいるか記すことはなかった。おそらく娘には内密にして文を届けてくれているのだろうが、それを知らせないことがある者が娘に対する最大限の配慮としているだろうか。

今頃何処にいることや。出来ることなら万全であって欲しいとグリユートは願った。

「陛下!!!」

その沈黙を破ったものは、扉外から響き渡ってきた騒々しい足踏みの音と共に、扉を蹴り壊すかの勢いで走り込んできたクロードの側近武官だった。

突然の珍客に思慮の海を漂っていた二人は一瞬面食らうが、あくまで表情は平静を保ち息切れした彼の姿勢を直させた。

「騒々しいぞ。客人に失礼であろう。何用だ。」

彼の切り替えの速さにはいつも感心させられる。

「申し訳ありませんでした!」

その側近の武官、グリユートが記憶しているところでは確かグレイア連絡特使といった武官は荒い息をつく暇もなく、まるでいつくばるかのように頭を垂れた。

「私はかまわぬ。緊急の要目と推測できるが……。私は退室した方がよろしいか？」

グリユートはちらりとクロードの顔を伺うが、クロードはグレイア特使に「どうなのだ？」という視線を送った。

「は！おそらくではありませんが、グラジオン国王陛下にもお耳通しいただくべきと推察します。」

彼はそういうと、懐にしまい込んでいた一枚の書簡を取り出し、片膝を付いて恭しくクロードへと献上した。

「ベルディナ大導師殿からであります。」

「ベルディナが？」

よくよく見るとその書簡の側面には魔法ギルド大導師の証である印が簡易ながらも刻まれていることが見て取れた。クロードは更に驚愕し、急いで筒をこじ開けると中に丸められていた粗末な紙を取り出し、それに目を通し始めた。

読み解くことにはさほど時間がかからなかった、しかし、クロードの視線はまるでその内容が実に難解なものであるかのように何度も何度も紙面の間を行き来し、深いため息と共にそれを机の上に置いた。

「グリユート、君も読んでおいたほうがいい。残念ながら君の娘の

「ことは何もかかれていないがな。」

グリユートは無言でそれを拾い上げ、そこに描かれた少しばかり雑な文字を追い始めた。

文字は書く者の人間性を表すとはよく言われることだが、なるほど確かにそこにある文字は彼の人間性を良く表しているとグリユートは思うと、その内容を吟味し始めた。

その手紙には特に難解な内容が記されているわけではなかった。素早く確実に意思を届けるため一文を短く区切り、極力シンプルな表現を使用しているそれは、緊急文であることを考慮しても王家へと届けられるべきものではない。

『ベルディナ・アーク・ブルーネスより、スリンピア国王クロード・ゼフィール・スリンピアへ。この手紙が手遅れにならないことを祈る。俺は現在クローナ村あり。クローナは現在、何らかの原因で魔物の襲撃にあり、俺たちはその防衛を行っている。この原因だが、おそらく昨今話題の件と関係があると思われる。この事件、なにやらきな臭い。裏に人為的な意思があると予感する。大至急対応と、俺の予感の裏をとられたし。あと数日もすれば、おそらく俺は魔法都市に足を運んでいるだろう。出来ることなら俺宛に順次調査結果をギルドへ送ってもらえると嬉しい。P・S これはあくまで俺の予感に過ぎない。出来るなら杞憂であることを望む。』

「クローナ村。目と鼻の先ではないか。何故君の国は対応が出来ていない？すぐに兵団を派遣するべきだろう。」

グリユートの心はざわめいた。クローナが魔物の襲撃にあり、ベルディナがそこに留まって防衛をしているというのであればかなりの確率で彼の娘、レミュートもそれに巻き込まれている可能性がある。今現在、彼らがこうして雑談を交わしていた時にもレミュート

は危険な目に遭っているかもしれないと思うとグリユートは気が気ではなかった。

半分なじるような口調をクロードは受け止め、グレイア特使を呼びつける、

「サイネリア議長を呼び出し、至急この件への対策会議を開くよう伝える。時間は本日中、場所は君に任せる。」

そう短く命令するし、それを受けたグレイア特使は「はっ」と短く敬礼し来た時と同じほどの勢いで部屋を後にした。

「というわけだグリユート。済まんが、俺はこれから会議をしなければならぬようだ。」

「ああ、分かった。済まぬ、取り乱した。」

グリユートは高ぶる己の感情を深呼吸で抑えつけると、カップに残された紅茶を一気におり少しばかり目を閉じ精神を集中させた。クロードは武人としての落ち着きを取り戻した彼に安心を覚えると、椅子から腰を上げ、側に吊りあつたマントを羽織る。一国の主に対応しい豪華な刺繍と、その中心に誇らしげに輝く国家の紋章が施されたそのマントは、紋章の側にただ一言『我はスリンピア王国とそこに生きる民のためにこの身を捧げる』という近いの文が刻まれていた。それは、クロードが戴冠の時、全ての国民の前で誓った言葉その者である。

これを肩にかける時、自分はこの国を背負い上に立つことを誇らしく思うと同時に、それにかけられた歴代の重みを感じるようだった。

「君だけには言っておこうと思うが、昨今の件、裏にガルフィス帝

国が潜んでいる可能性もある。出来ることなら、君の国で奴らへの警戒を行ってもらいたい。」

すっかりと国王としての表情を取り戻したクロードに一種の尊敬を持ってグリユートは立ち上がり胸を張り、眼鏡く彼を射貫いた。

「承知した。境海の警備体制を強化しよう。緊急時には海上封鎖も視野にいれてな。」

そう答えてグリユートは身体に流れる血流が沸々と煮えたぎるように感じられた。やはり、自分は生涯を戦いに身に置くことを宿命づけられている、と高鳴る闘争心に心を躍らせた。

「ベルディナの言うとおり杞憂であればそれでいいのだが。」

「国の上に立つ我々が楽観的であってはならない。分かっておるよ。」

そしてグリユートは、それにしても…と口調をゆるめると少し悪戯な笑みを浮かべ口を開いた。

「お互い国王という立場が板についてきたものだ。時間の経過とは不思議なものよ。」

クロードは「はは。」と笑い、「まったくその通りだよ。」と答え表情をクシャツと崩して片手の平を掲げ口に笑みを浮かべた。

「君の従者を呼び寄せる。帰国の際は警備艦で護衛をさせよう。では、健闘を祈る。」

グリユートは去っていく共に「君も健闘を。」とつげ、クロード

は振り向くことなく、ただ右腕を掲げ握り込んだ指から親指だけを引き延ばすとしっかりと天へと向け「任せておけ。」と背で言葉を返した。

（ベルディナよ、私がそなたに願うことは今でも変わらぬ。娘を、レミュートを頼んだぞ。どうか守ってやってくれ。）

グリユートは手早く帰国の準備に取りかかると、腰に巻かれた帯の弛みを直し、少し折れ曲がった袖口をなでつけ、前合わせのボタンを整えた。

そして彼は束の間で娘を思いやる父親から国家その者を背に負う王へと自らを変貌させる。

それが、彼が20年の歳月を持って成し遂げてきた全てへの答えだった。

スリンピアの賢王、グラジオンの戦王の束の間の邂逅はそうして終演を迎えた。

(6) 夜空への誓い

クローナの村は魔法都市とスリンピア王国の狭間に位置する村であるため、その警備体制も他の村々と異なり、非常に変則的だ。

名目上は魔法都市とスリンピア王国の共同警備と銘打たれているが、その実態は季節の移り変わりに両国の警備隊が入れ替わり立ち替わり村に駐留するという形となっている。

そのために季節の移り変わりの時期にはその交代のために村の警備が薄くなるという問題が、この制度が制定された当初から解決されないまま残されていた。

そして今回、スリンピア王国領土内で頻発する魔物がらみの事件への対応で、本来なら魔法ギルドの警備魔術士と引き継ぎを行うはずであったスリンピア王国警備兵団は到着の遅れる彼らを待ちきれずに村を後にしてしまうという自体を引き起こしてしまった。

そして、まるでそれを狙ったかのように勃発した今回の事件。そのあまりにもタイミングが良すぎる襲撃はまるで魔物達がそのことを知っていたかのようにだとベルディナには感じ取れた。

それが今回の事件、昨今頻発する同事件に人為的な意識が裏にあるのではないかと彼が推測する根拠にもなっていた。

「無謀すぎる。」

一室にミリオンの低い声が響き渡った。

レミュートの目覚めまで持ち越された作戦会議は、予定通りベルディナの主導で進められ、教会の広い一室には村の重役を初めとしてミリオンとユアの姿もあった。

起きたたてで頭のボンヤリとしているレミュートにベルディナは会議の始まりに際して、彼女にその後を伝えるついでに村の現状を一つ一つ確認しながら伝えていった。

それを聞き、レミュートは村の被害や重軽傷者の数に口を噤んだが、それに対して死者がそれほどの数に上らなかったことに僅かながら安心を覚えた。

そして、ベルディナは順番に村の復興に当たる者の報告を直に聞き、一つ一つ対策を提案していった。それは実に円滑に進められ、会場に集まった者達も彼によってよく練られた方針を聞く度に安堵の表情を浮かべるようになっていった。

しかし、彼がその最後に口にした一言によってその場には再び冷たい緊張が張り巡らされることとなる。

「この襲撃は今回だけでは終わらない。おそらくこれから幾度か、それこそこの村が減びるまで繰り返されるだろう。」

その言葉はようやく希望の光をつかみかけた者達を再び絶望の底へと落とすには十分な響きを持っていった。

あれが再び繰り返される、ようやく復興の兆しが見え始めてきたというのにそれすらも根本から破滅させるものが今も目を光らせているというのか。

ミリオンとユアには予め彼の口からそう伝えられていたが、面を下げる村の住人の表情を見てしまえば彼らの表情が冷静でいられるはずはない。

そして、ベルディナは続ける。

「助かるためには、この災害の根源を何とかしなければならぬ。それは俺たちの仕事だ。」

と。

レミユートは面を上げ、ベルディナの瞳を伺った。彼の瞳には何の絶望も躊躇も感じられない、ただあるのは力強い決意と覚悟の光だった。あれは、国家に忠誠を誓いそのために命を捧げると宣言する騎士の眼と同じだと感じられる。

ベルディナは諦めてはいない。だったら、私も諦めない、とレミユートは誓いを新たに周りを見渡した。

そんな彼女の様子をつかがっていたベルディナは一瞬、「フツ。」と笑みを浮かべ、沈黙の巡る議場に再び言葉を投げかけた。

「無謀だ。」

再びミリオンが声を低め、ベルディナをまるで親の敵と言わんばかりににらみつけ、その視線で前言撤回を求めた。

「だったら誰が代わりになるという？お前か？お前では魔力の動きを肌で追うことは出来ないだろう。それに村の防衛は誰がするんだ？お前以外が全ての指揮を執るといえるのか？お前に言わせてみればそれこそ無謀だろう。」

ベルディナの言葉には冷たい刃が含まれていた。ミリオンの隣に座るユアは彼の視線とベルディナの言葉に挟まれ、既にその瞳には薄い涙が浮かべられていた。

本来ならミリオンが彼女の肩を叩き、大丈夫だと一言笑みを浮かべれば彼女は安らぐはずが、とうの本人達はユアに気を遣う余裕を持ち合わせていなかった。

「しかし、危険だ。森の中に何かが居るとい話は分かる。それを何とかしなければならぬと言うことはもつともだ。しかし、君とレミーの二人だけでそれを行うなど。いくら君が大導師と呼ばれる偉大な魔術師であっても、私には容認することは出来ない。私には

レミーを守ると誓った。君は私にその誓いを放棄せよと言うのか。」

ベルディナは一瞬レミュートに視線を向けた。レミュートにはその視線がまるで自分に「お前は どうする？」と聞かれているように感じられ、自分はいつたいどうしたいのか。

少しの間だけまぶたを閉じ、自らの奥底に眠る願いと誓いを掘り起こした。そして、それはすぐに見つかった。

探すこともない、彼女は既に夕日の沈む教会の広場で決意し、誓い、そしてそうあると一歩を踏み出したのだ。

「私は、守るために戦うと誓った。だから、そうありたい。」

何の工夫も隠匿もないその言葉はあまりにも短く彼女の口から生み出され、今にも机を叩いて声を荒げんばかりの二人を黙らせるには十分な力を擁していた。

ミリオンはとっさにベルディナに向けていた視線をレミュートに向けてしまい、内心「しまった」と舌打ちした。しかし、彼女の視線もまたミリオンの鋭いそれに負けない、いやむしろそれすらも圧倒してしまうほどの鋭さでミリオンの瞳に鉾を打ち付けた。

「……分かった……。君の意思を尊重しよう。」

ミリオンはレミュートに対して騎士の誓いを立て、この命をとしまで彼女の命を守ると決意した。そして、今彼の口から紡ぎ出された答えは、彼女を守る対象としてではなく共に戦うことを誓う戦士として彼女を認めたと言うことの表れだった。

「ありがとう、ミリオン。」

深くにもレミュートは涙をこぼしそうになった。尊敬する者から

認められると言つことがこんなにも嬉しいことだとは思ひもよらなかつた。しかし、涙は見せない。見せてしまえばおそらく彼女はまた彼に守られる存在に戻つてしまふと感じたから、彼女は涙を見せなかつた。

「決まりだな。村長もそれでいいか？」

全く堅苦しい奴らだぜ。とベルディナは二人を見て思い、それだからこそ自分はこの者達と肩を並べられると感謝し、毅然とした態度で村長に向き合つた。

村長と呼ばれた教会の神父はただ一度だけ会場を占める村人の意思をその表情で確認するとゆっくりと首を縦に振つた。

「作戦決行は明朝、朝焼けの納まる頃合いとする。俺とレミーは森へ、そのほかはミリオンを筆頭に武器を持てる者は村の周囲に展開しこれを守り、ユアを筆頭として後方、この教会の礼拝堂に救護施設を設立。もしも3日して俺たちが戻らなければ作戦失敗と見なし、直ちに王都へ避難せよ。以上、質問は？」

質問する者はいない。皆それぞれ自分がすべき責務と重圧に身体をなじませるのが精一杯なのか、まるで葬儀の前夜のような沈黙が保たれていた。

「よろしい。これが正念場だ。各自奮起のことよろしく願う。出来ることならこの場にいる者、生き残つた者達全員が変わらず勝歌を上げられることを祈る。天なる神と神竜の巫女の祝福を。」

「ルーヴィス」

祈りの言葉はその場の全ての者の口から自然と紡ぎ出され、世界

を守る神竜に捧げられた祈りは夜空に舞い上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0074f/>

聖剣の姫君 第二部 黄昏の行方

2010年10月8日11時51分発行